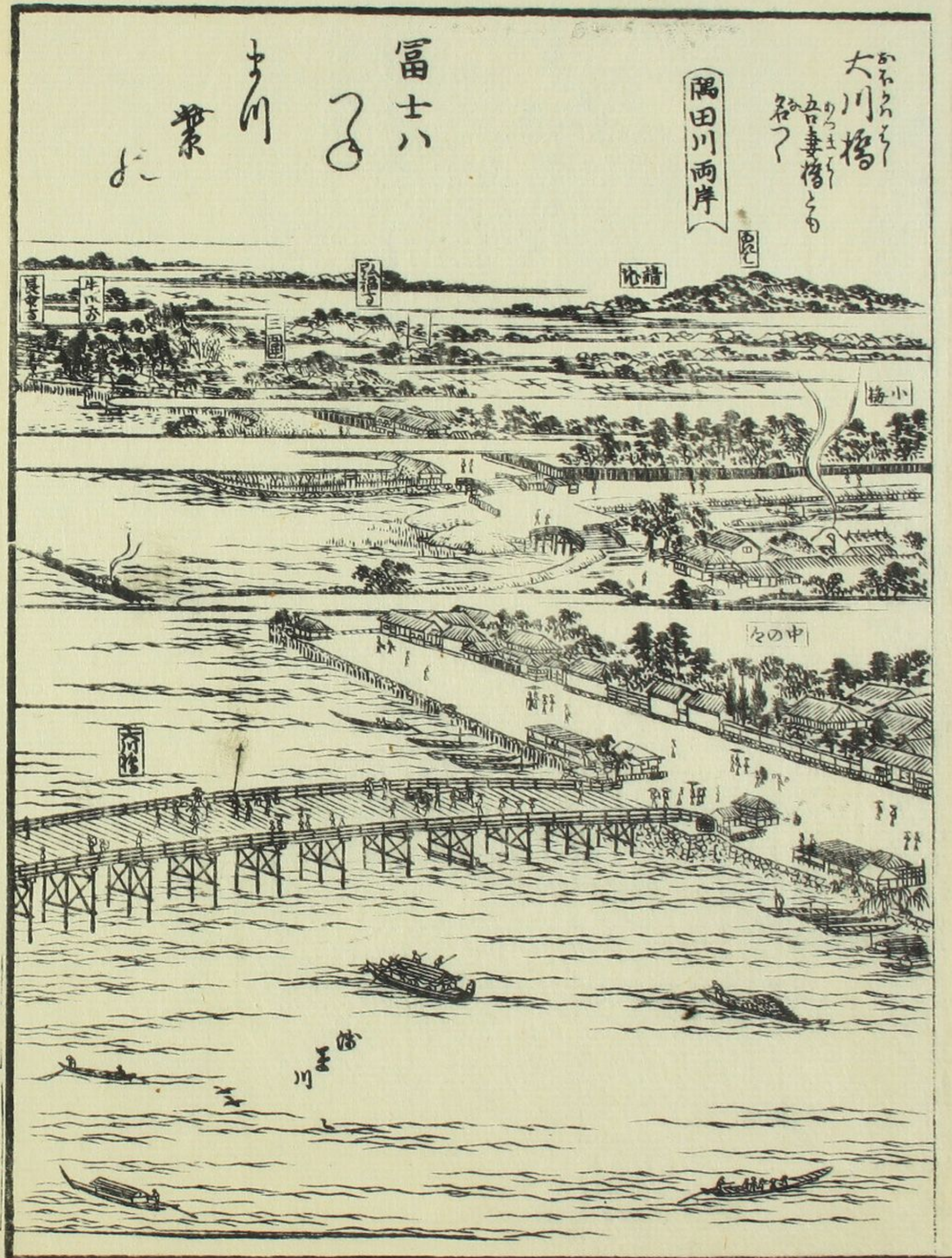
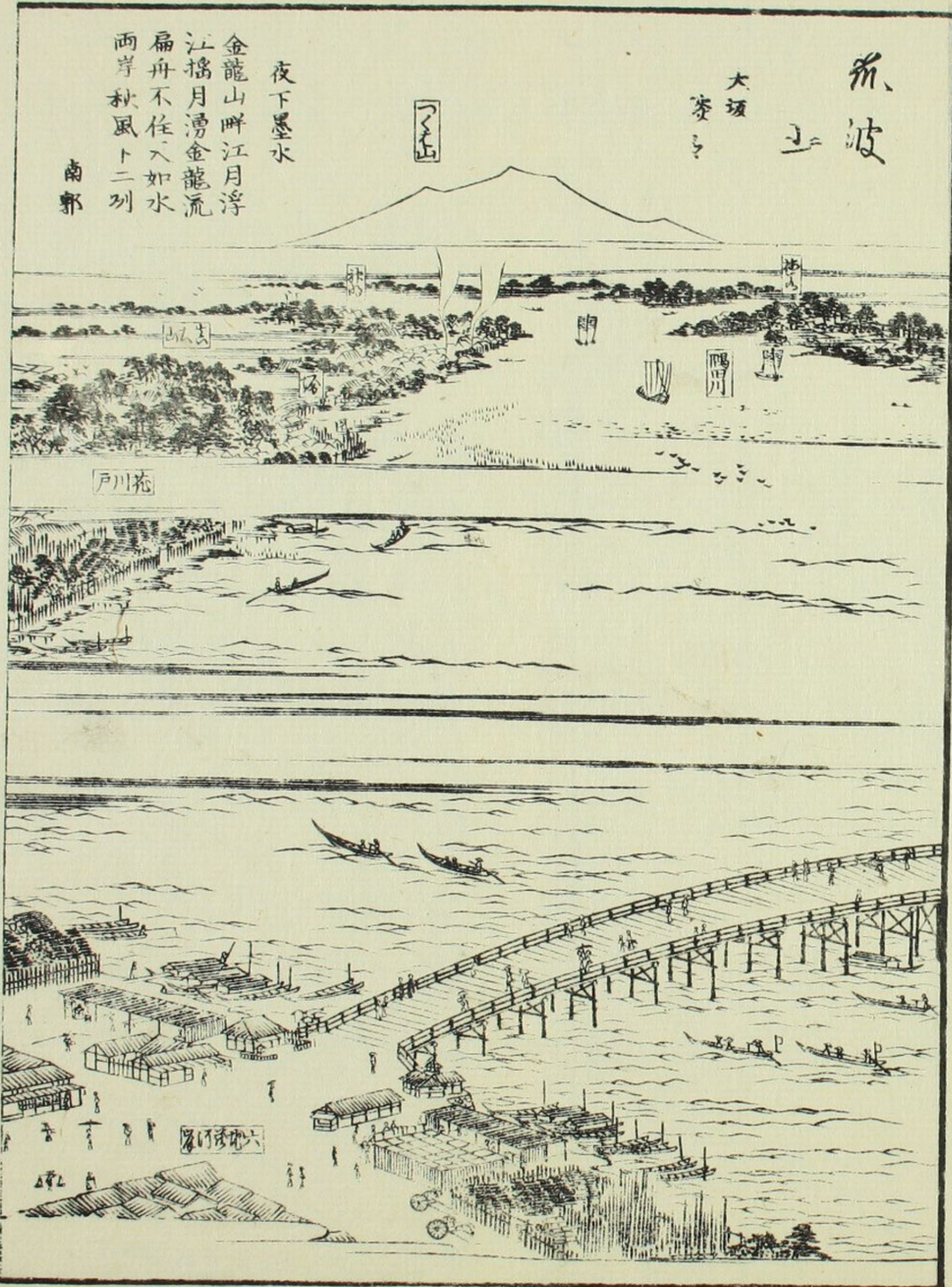


江戸名所図會

十九





三圍稻荷社

元禄の頃、
老嫗あり、
老嫗田面より、
一つの狐、
それを食ふ、
わらわらし、
狐もよこせ、
名に記せ、
白ひけるを

隅田川東岸



五元集

早稲酒中

きつ川松

ふい物と

焼り

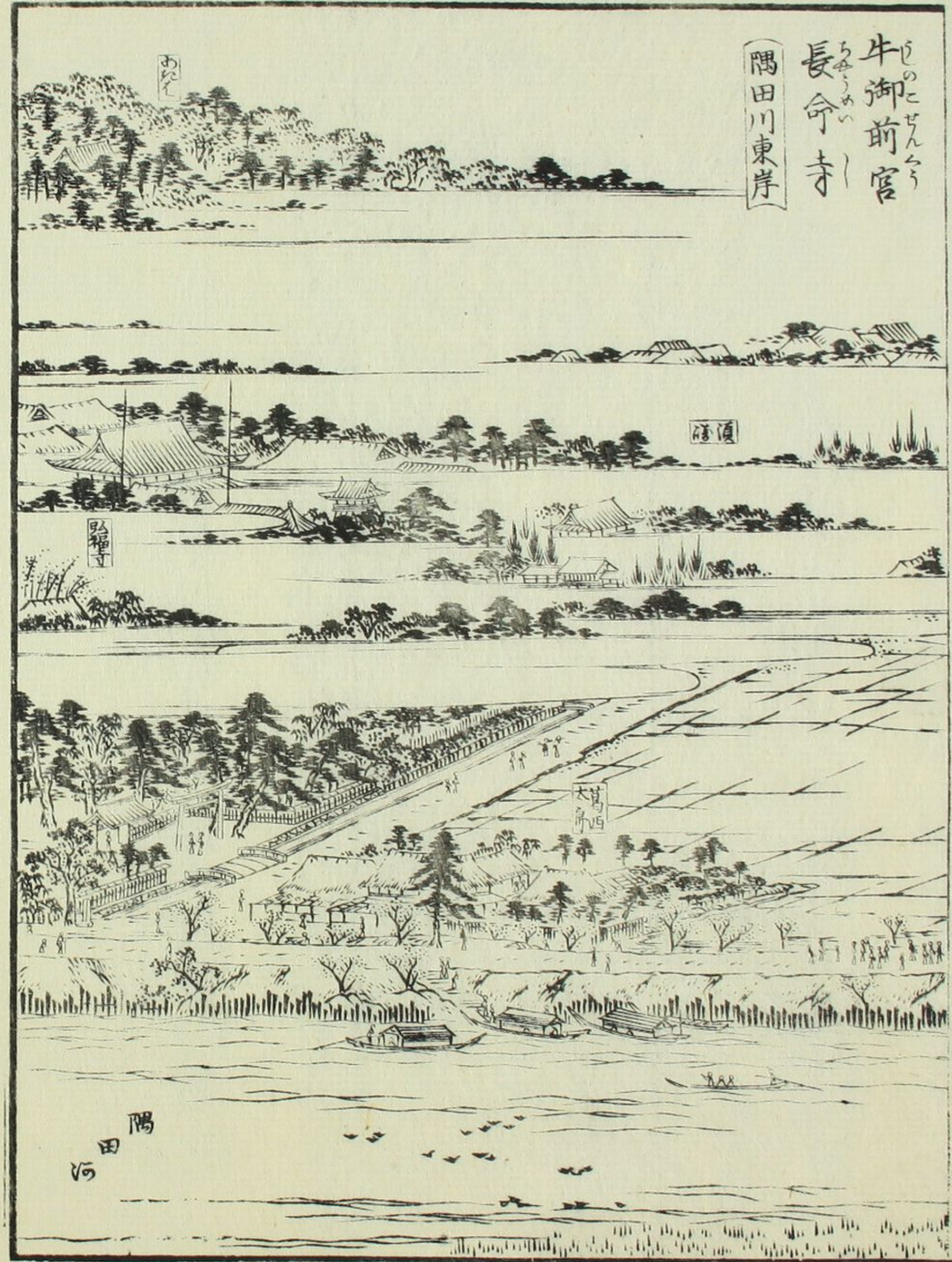
と

其角





五之集
牛御前
是やこれ
雨を
下
其角

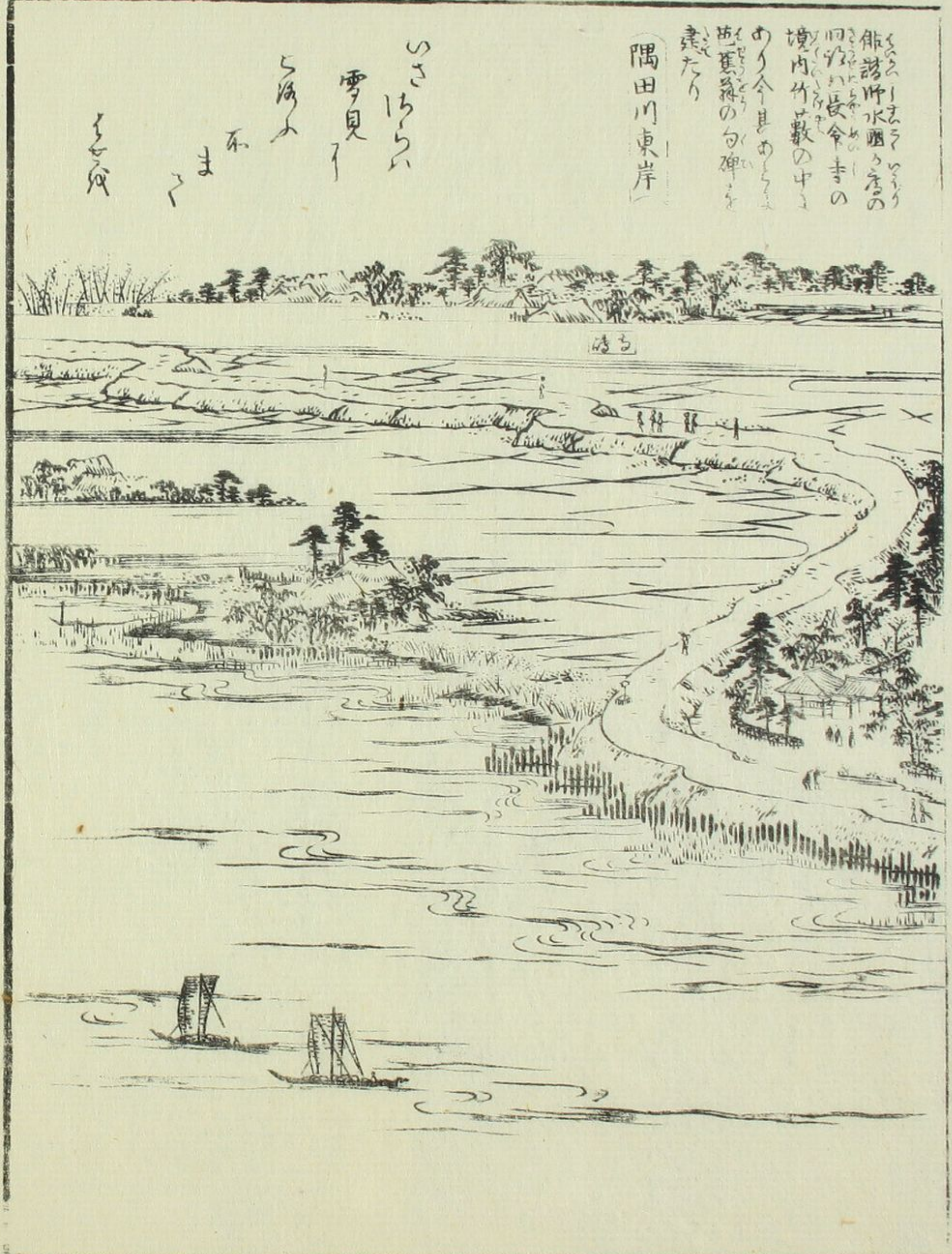


牛御前宮
長命寺
隅田川東岸

隅田河

能登所水西の産の
 同治の長命寺の
 境内竹藪の中
 のり今其の
 出雲孫の白碑を
 建てたり

隅田川東岸



雪見
 不
 海
 不
 不
 不

皇子 王孫權 歩二坐り 相傳清和天皇の御宇貞觀二年庚辰秋

九月慈覺大師東國弘法の頃素蓋鳥尊位冠の老翁と化現此

沈跡を垂承く圓家を守護とんと告め仍大師一社了奉

上皇の良本阿闍梨を留て是城守らむ 尚社の本比佛大日如來の像良本阿闍梨と云 又五十七代

陽成院の御宇清和帝第七の皇子當圓遷されをたす天慶

元年丁酉九月十五日此地よ於て薨一依阿山良本阿闍梨ら小

暮皇奉皇牛御前の相殿よ合祭り奉るとい 其後雲はあり云云素蓋鳥尊位第二の御子

まを留てせぬと云 或入云尚社を牛御前と稱すあらすらの比の牛嶋の出崎とあり

つれを思て牛御前と唱たりしを後世語りて寺を前書あらたすを御前と稱せ

と云 按又撰列傳田御崎前傳御崎其餘相列の二本大江戸の月岬等とて海に臨め此あり

今尚社の辺を須沙村と名はるもわが海辺の例なり其頃ハ文をも例傳は作りたりと

ありしやうに著あき著海は廣く年を歴て陸地となりしに次の寺傳蓮華寺の条に

はまのひらり其条のをのりせ考る牛の御崎とする最も據あるに似たり云々阿の

假字の美を清く一時の支字を前書にあらす再ハサキの訓を音に抄くを云々

されと神号と傳前と稱するの又人のうさも用ひたりしむ往々其例ありと云々

あらは故よこれを思ふ

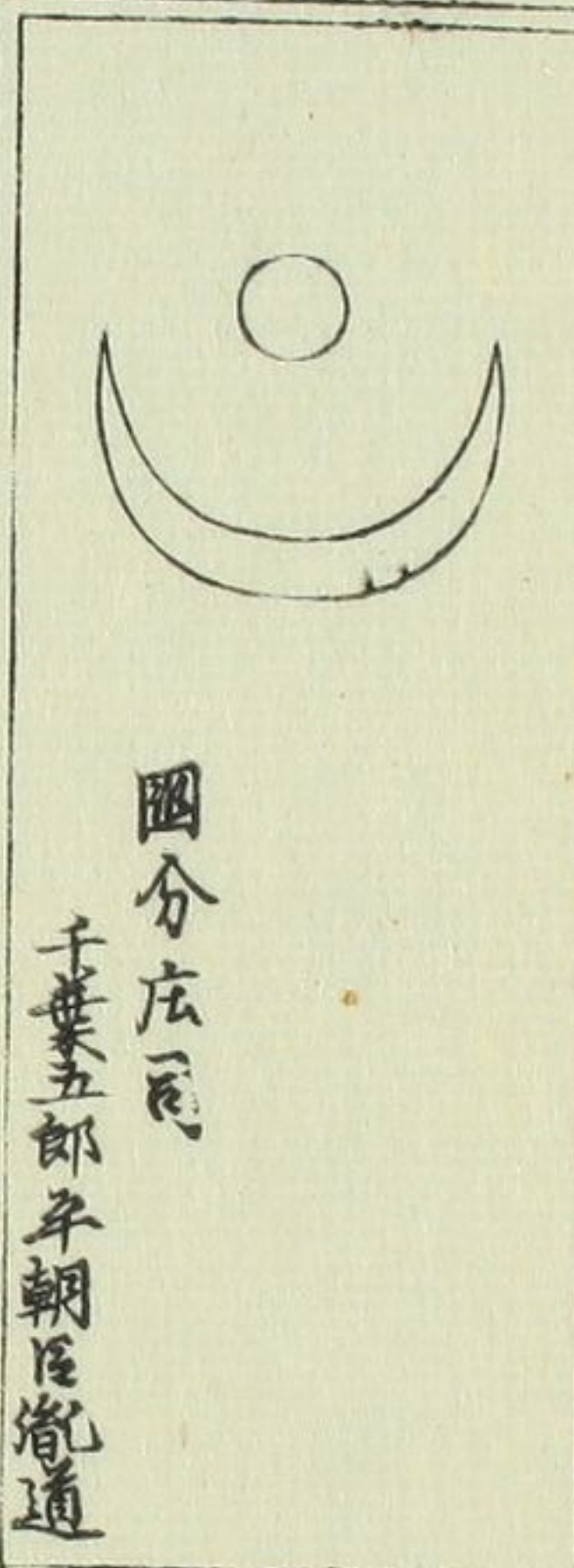
法華經十部供養碑 今内陣に收りあり長三尺三寸五分あり幅一尺六寸五分あり厚さ

奉造立釋迦像一軀 貞觀十七丁未天三月日

法華十部 明王院

千葉五郎胤道旗 一流 別當最勝寺に存せし東鑑に治承四年庚子九月十九日

同添狀壹通 其文は為社に往古先祖千葉家再興の官社たるに依て是を収りしに



國分庄元 千葉五郎平朝臣胤道

長三尺一寸三分 幅一尺九分 考幅九分

梶原景季書 其文は為社に往古先祖千葉家再興の官社たるに依て是を収りしに

小田原北条家神領寄附狀 壹通 其文は頃時頼朝の自田合ハ十箇所

當社に往古録倉右府將軍頼朝卿宗叙厚く養和元年辛丑宮

社を經營のり小於て子葉々常胤其頃當國の主たるふり許多の

氏直老臣大道寺景秀小命一先親の例に依り神領寄附あり則

寶壽山長命寺 通照院と号し天台宗東叡山に属せり本所の

鳴辨財天傳授大師の作り長命水 日一堂の後の方より延壽推

自在庵舊址 堂の右竹敷の中より能辨財天圓を考室をむいて住たり今

いさ信らり雪見より後の中より

當寺昔のいささかの庵室るしう寛永年間 大樹御遊獵の初少く御不豫

小あらせられし此寺内より休せたまひ庭前の井の水をりて御薬を服

あひし須臾中へ常小あらせまひし此井より長命水の号を賜り

寺の号をも改むる旨 台弁あり亦長命寺と稱す 昔の常泉寺

殊更當ちの雪の名所なり前より隅田川の流をうけて風多たらむといふ

牛頭山弘福禪寺 牛御前宮の東に隣る此辺を須崎といふ 黄檗派

の禪室にて洛陽萬福寺を模して本尊の唐佛の釋迦如來左右に迦葉

呵難より定山鐵牛和尚延寶紀元癸丑創造寸毎歳七月十五日大施餓鬼修行有

佛殿 額に 大成徳 聯 本寺の 本庵の 筆あり

寛天日月久晦祖性雪温饒 早地雷音雷林木尽華葉

見相傾身敢保未忘法相 揮毫布比自然海界黄金

坐後界上主并弘福禪林人々志を 坐その中新建大聖堂ありて依

大治鍊米未地入選 虚空粉碎方許を場

木犀の佛殿 剎竿旗 座禪堂の佛殿 聯 右の柱 龍の筆

一株老桂長垂蔭 第斛天香遠襲人 聯 右の柱 龍の筆

法積山推摩詰家凡真廣大 日未月往衲侶法古永殷克

道泰玉麟現瑞 林東墨鳳友儀 聯 右の柱 龍の筆

大坐前拜佛應云須至云 高懸寶鏡在法鏡終身

鐘樓 坐禪堂 聯 右の柱 龍の筆

天王殿 内より釈迦の像を 聯 右の柱 龍の筆

浴室 浴室 聯 右の柱 龍の筆

食堂 佛殿の 聯 右の柱 龍の筆

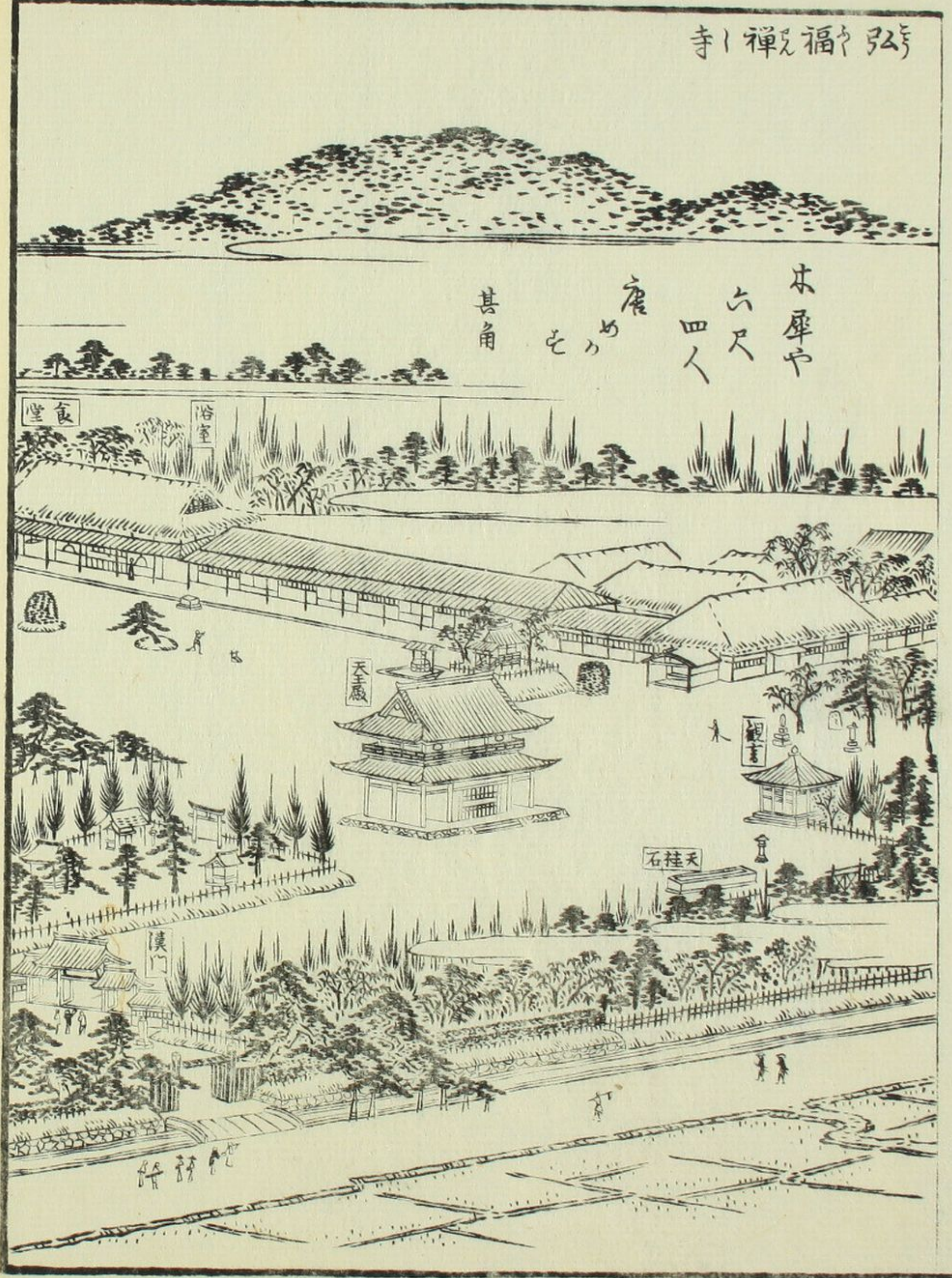
天王殿 内より釈迦の像を 聯 右の柱 龍の筆

鐘樓 坐禪堂 聯 右の柱 龍の筆

鎮守宮 天竺春日八幡を祀りて財天禰祈 鹽竈明神等の諸神を崇む

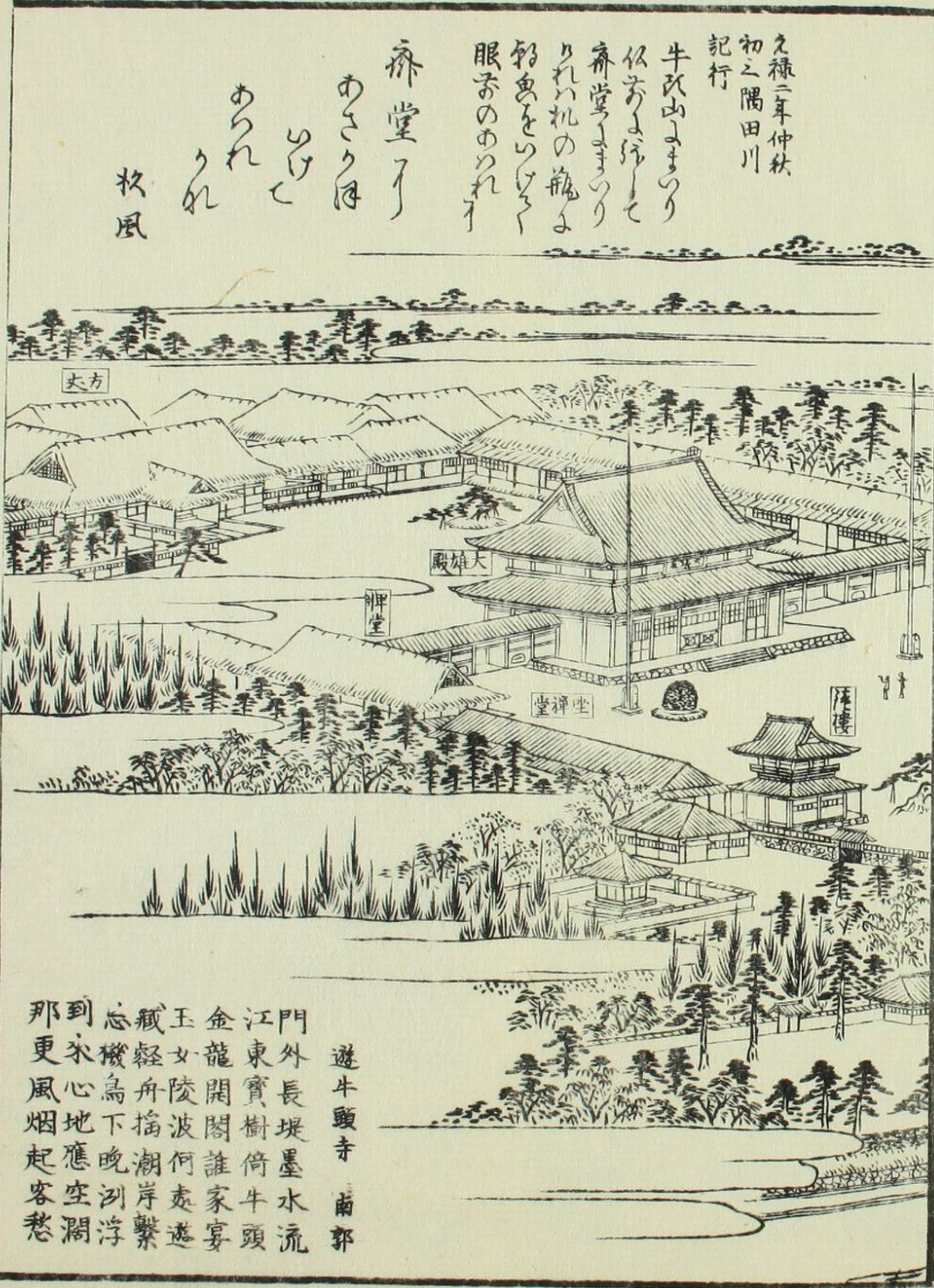
天桂石 経巻の前の石の 羅尼本を細書す

弘福禪寺



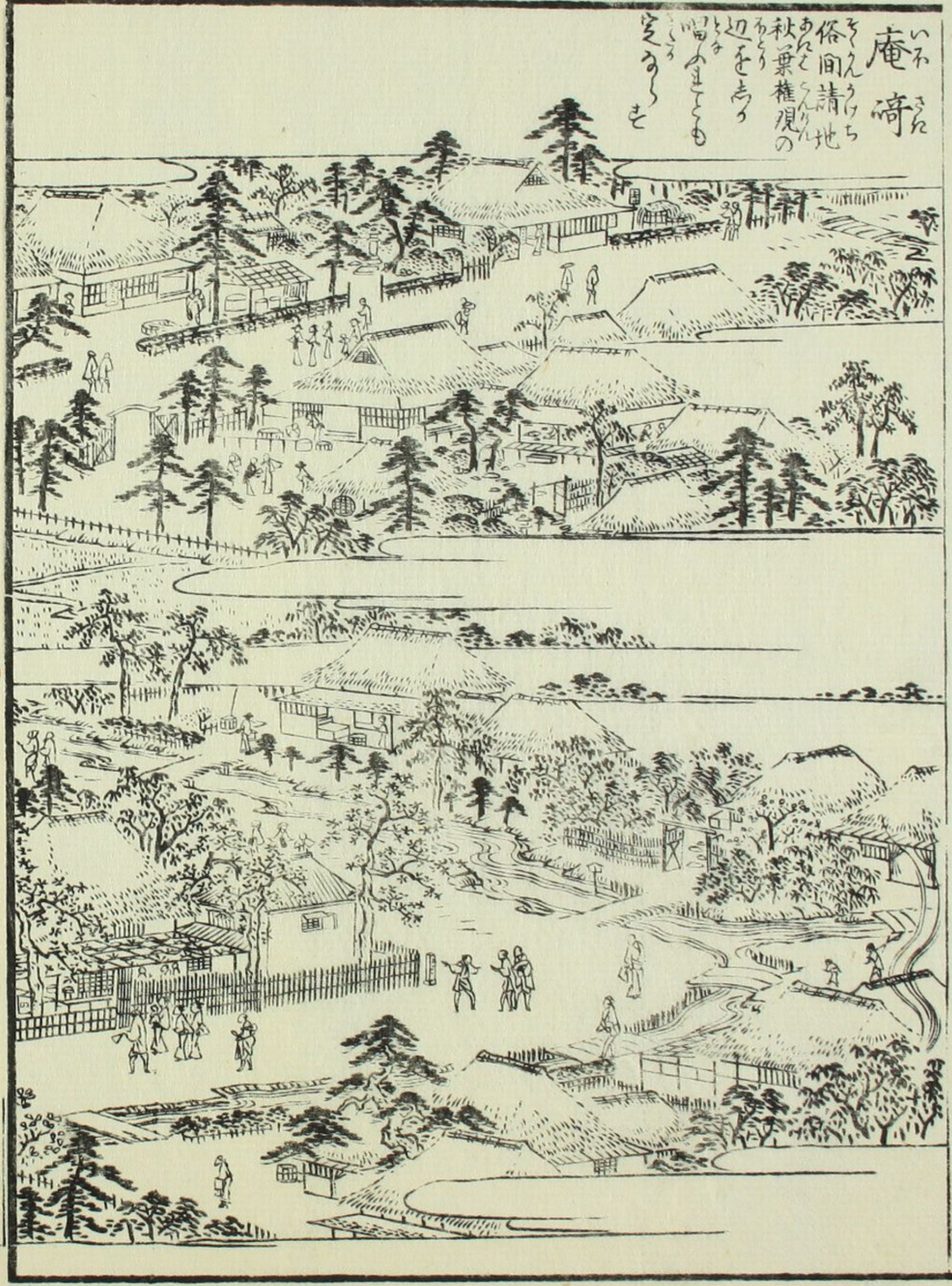
本屏や
六尺
四人
唐
其角

元禄二年仲秋
初之隅田川
記行
牛改山ままのり
似あふまのり
齊堂ままのり
りれ机の籠
鉛色をり
眼赤のり
齊堂
あさくほ
あられ
あられ
あられ
秋風



遊牛頭寺 南郭
門外長堤墨水流
江東寶樹倚牛頭
金龍閣誰家宴
玉女陵波何處遊
藏輕舟搖湖岸繫
忘機鳥下晚洲浮
到水心地應空澗
那更風烟起客愁

いん 庵 崎
 俗間請地
 秋葉権現の
 辺を志す
 唱あまてとも
 定るる



頃あたり
 請比秋葉の
 近傍まとの間
 酒肉店多く
 各都をくま
 鯉魚を二畜
 酒客おろく
 うに宴飲ま
 中も葛西
 左岸といつら
 萬西二市
 清童のを高
 ありと云けぬれ
 とも是非をえ
 いさやといふ
 背麦飯をくま
 賣たりりの麦
 計とてころめて
 麦汁と唱たり
 今いさやとの
 らひて麦汁と
 志る人まれぬ
 ありぬ



牛頭山弘福寺大鐘銘並序
 瑞聖鐵牛和尚住弘福之明年修葺寺宇將大
 伊氏伯耆守直武公與玉心院太夫人壽林元榮
 師茂心施金為造巨鐘以利幽顯寓書徵余銘為
 銘曰阜分有大法辨整飭官兮曷殊天匠幸值
 牛首之阜分全乃召鳧氏兮簡赤金範斯巨器
 賢守鎮禪林曉昏考擊兮萬歲以空為口兮密
 兮永鎮祈慶兮子孫振振以千億兆樂業兮四
 豈淺鮮斯行莫殫一七徐林鐘上幹穀且
 擬仁益勤兮莫殫一七徐林鐘上幹穀且
 貞亨厥年歲在著雍執四世高泉激敬撰
 支那國傳臨濟正宗世四世高泉激敬撰

漢門總門をいひ
頼りて山
 鐵牛の筆あり

牛法山

聯右
左
 筆上

福地弘安法象集
 玄門高深聖法

秋葉大権現社 同所三下のあり東の方請地材あり
 あり 遠別秋葉権現を勧請し稲荷の相殿とて
 あり 或い云正應年間の勧請ありとも別當ハ三寶寺末末
 あり 當社の権現

千葉山満願寺と号す神泉の松と稱する社前ありて松の控より
 清泉涌出するを諸の病み験ありといふ
 境内林泉幽邃より四時遊觀の地あり門前酒肆食店多く名
 生例を構へて鯉魚を蓄ふ

清龍山蓮華寺

寺鳴村小あり

寺記云く昔此地の海原より後世例于深
 當寺ハ真言宗あり醍醐の三寶院小属と

太子自彫造ありと云北条經時の念持佛より往古ハ相及鎌倉依
 月谷のありを弘安二年の秋北条頼助寺院よりひよ奉り共あり
 此比へ引移し同年八月二日入佛供養を營り故今に至る迄此日を
 以て縁日とて又是より先寛元二年の夏國中大ニ疫疾流行し
 人民死する者少かりと経時頗小是を歎死奉り告て諸人の病



東門

西列



請比
秋葉権現宮
多代世編并社
社
丹楓
吹林の
此の
明
新

本社

新

門

若くは消除せんとして懇々祈願と成夜奉る経時よ靈示ありて秘蔵
 を賜ふ即此秘蔵小よりて其頃病を退る命を全する者とて
 仰らんとするなり 冷たい雪が降る
件の秘蔵を抄せる

相傳小寛元四年丙午三月下旬北條經時疾よ臨む其時舎才時頼
 を側へ招け示し云く我疾難治あり死後よ至らば一宇の林苑刹を創
 建し年頃念ふ所の聖徳太子の像を安置すべしといひ終て同四月

朔日享年二十八歳小して逝去あり

依時頼遺命を奉りて鎌倉依久谷一宇を創き蓮華寺

と号す 經時の法号を蓮華寺殿前 即辨法印審範を以て住山とて

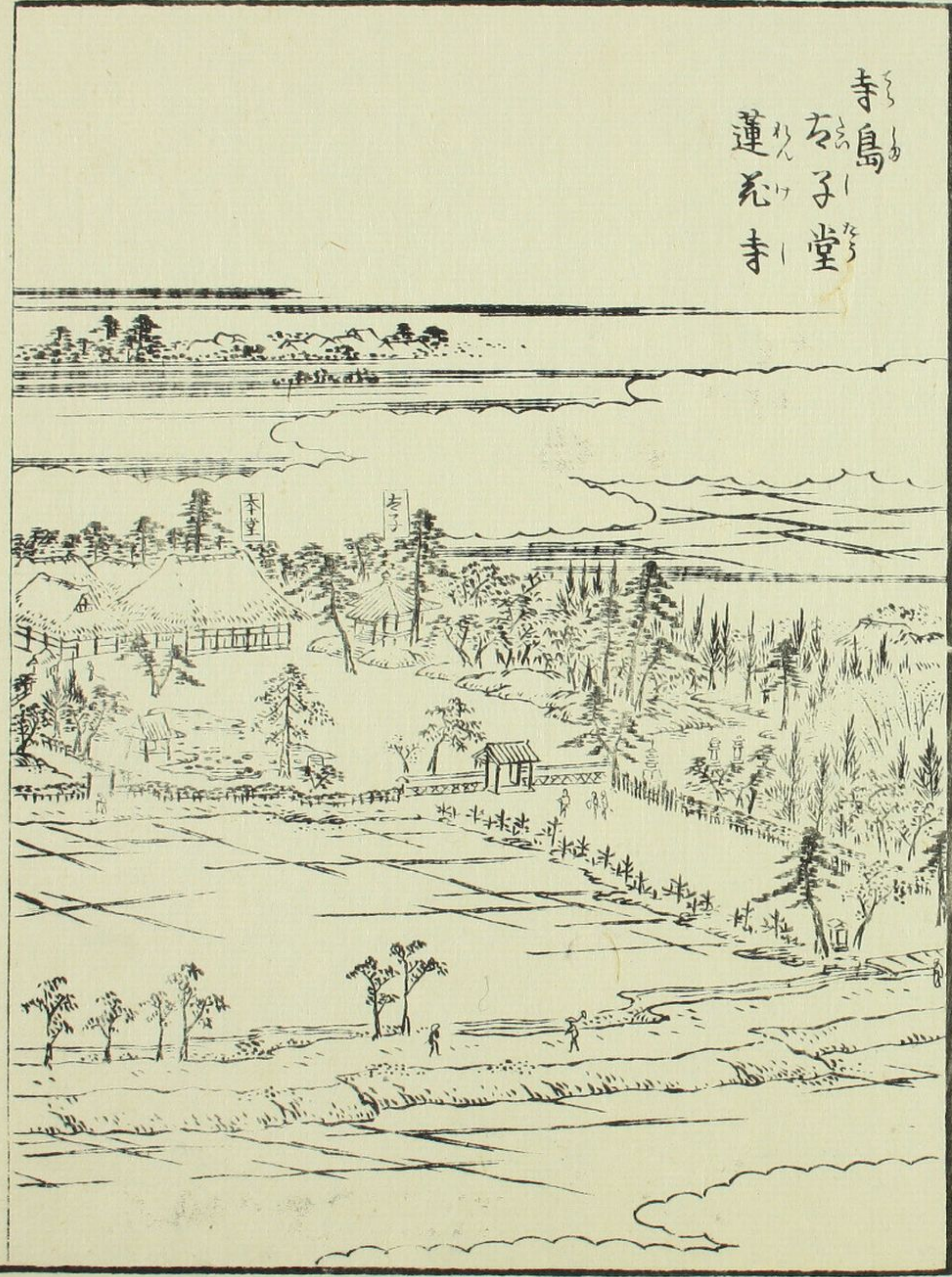
又其後經時の子頼助此寺鳴を領せし

之雖の志頻より忽小刺髪し弘安三年の秋鎌倉君の蓮華寺に

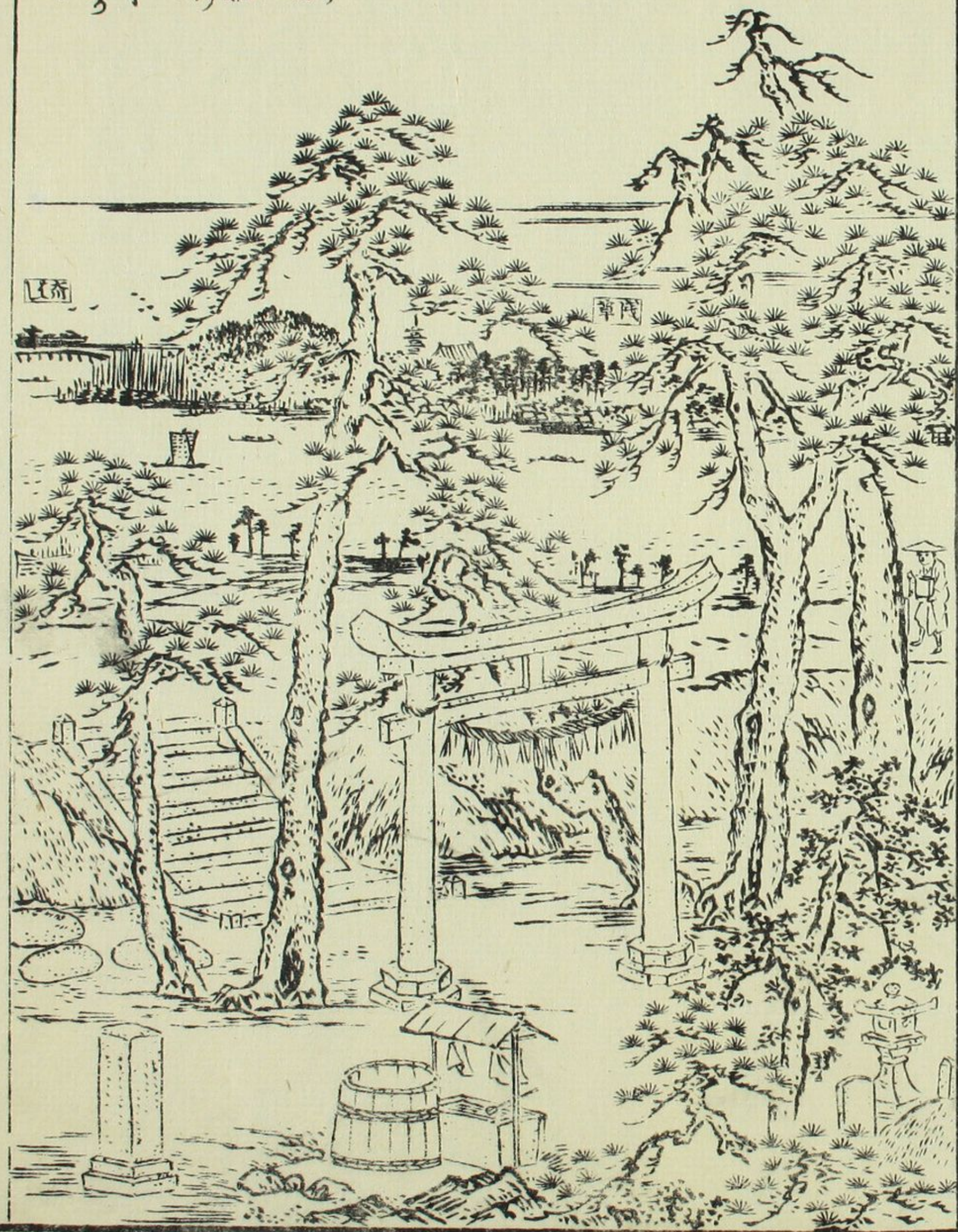
寺鳴小稱し自号山たり 依りて月大僧正頼助と号せり

たじあるへ一端系も経時の子よ頼助といふ号を載し傍に依り木傍と住せり

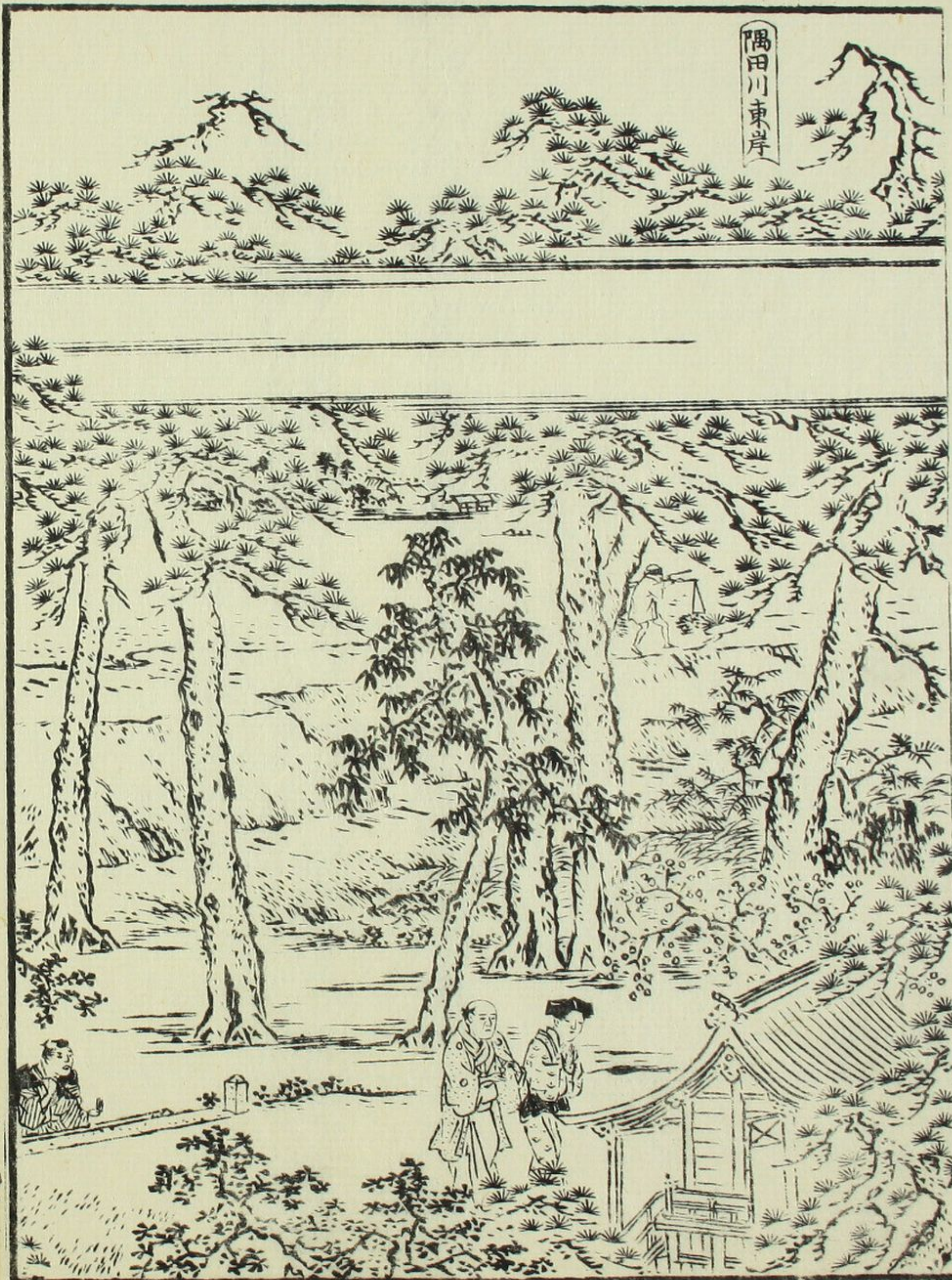
寺島
 太子堂
 蓮花寺



白岩懸明神社



隅田川東岸



追討の大勢とて左衛門佐平直方右兵衛佐中原成道等朝探り
應一ニ萬二千余騎より發向と忠常其身千葉の城より楯籠舎
陸奥権女忠頼を大ねと其勢二萬余騎を率へてすここの
南陣を取同十五日官軍成道の舎才伊勢成俊直方の子
息阿多見四郎聖範共々勢を合せて先登り方々戦ふ故先陣の
右頼效走とされと忠常より殘兵一萬五千余騎を駐せられ官軍の
後陣ありあり直方も中道の勢の落着きと推せりといふあらと引
返り放軍の兵卒を集んとて隅田河原に陣を敷と云

東鑑曰 治養四年庚子十月二日辛巳武衛相乘
于常御廣常等之舟藏濟太井隅田西河精兵及三
萬餘騎赴武藏國豊嶋權中清光葛四三郎清重等
最前泰上又足立右馬允遠元兼日依受命爲御迎
奉向云云

北條九代記小文治五年七月十九日頼朝と與別養衛追伐の首途
ゆふと云条下千葉成常胤八田右衛門尉知家東海道の太ねと

とて常陸中總兩國の勢を率へて宇方行方を經て岩崎より隅田
川の湊より渡り遼下界

隅田河原 隅田河原よみれ

隅田河堤 深堀橋より一橋り然谷に至る行程凡拾六里是を然谷堤と

云天正二年小田原北条氏これを築たりといふ

官府の命ありて二圍編芥の辺より本母寺の隣迄堤の左右桃橋柵の
二樹を殖せられ二月の末より孫生の末より紅紫翠白枝を
交へされわら錦繡を晒せり如く幽艶賞するに堪たりと云と董菜碎
米菜盛りの頃此比より花禮を敷り如く一時の壯觀たり

隅田宿 竹れの比をいふ今あるへからと往古の興別街道の釋舎
あるへ東艦は治養四年庚子十月二日頼朝を右井隅田の両河を渡ら
るるといふ事なり今日武衛の御乳母故八田武者宗綱の息女

小山野大橋

夫本集

西二位

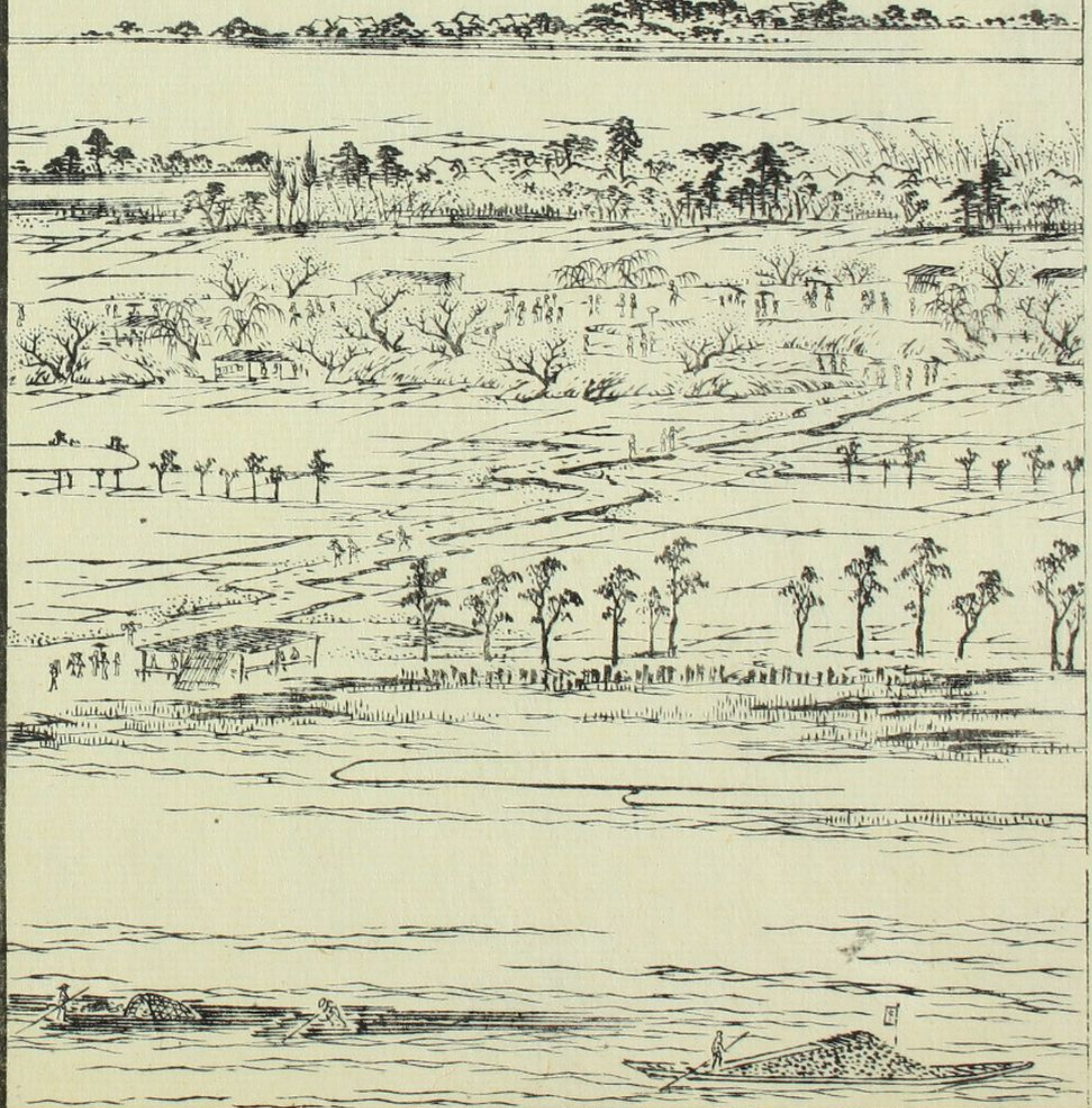
御當家より

筑波根の
 春あき
 春風よ
 す〜
 河原の
 花を
 石と
 ろ〜
 冷泉
 宿村々



宿場
 の
 河口

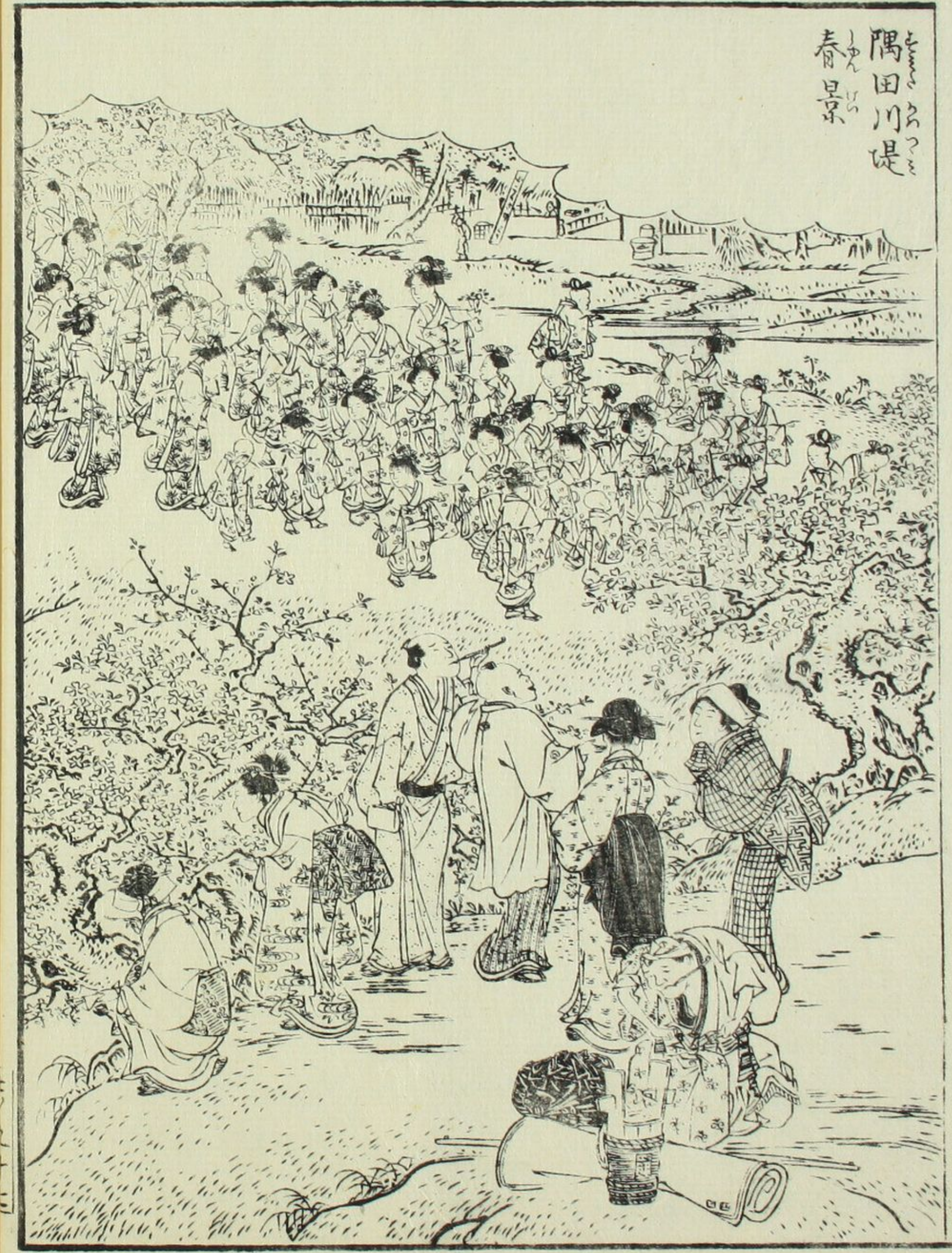
陽田川渡
 陽田川東岸
 初花も
 夕のこも
 夕のこも
 めらり
 す〜
 河原の
 春あき
 と〜
 ま〜
 冷泉
 宿久々





隅田川の堤をさうらふは
 青柳の枝髪も緑の眉
 かわひさしよりたれをさる
 花のふところひそめさく
 えさしひはくらひあんと
 ままゝにたれたいえいと
 えむありこたえくさる
 ひとさくさたる挿頭も
 ちねんちんとささくふなの
 とさる木の幸
 ありあらし

隅田川堤
春景



本母寺
梅若塚
水神宮
若宮八幡

隅田川東岸

本母寺

会

あり

月の

其角



田圃雜記

つうへの塚の
すゝめりた
今のつうへに
おるえて

古塚の

くけ行の

すゝめり

すゝめり

ゆき

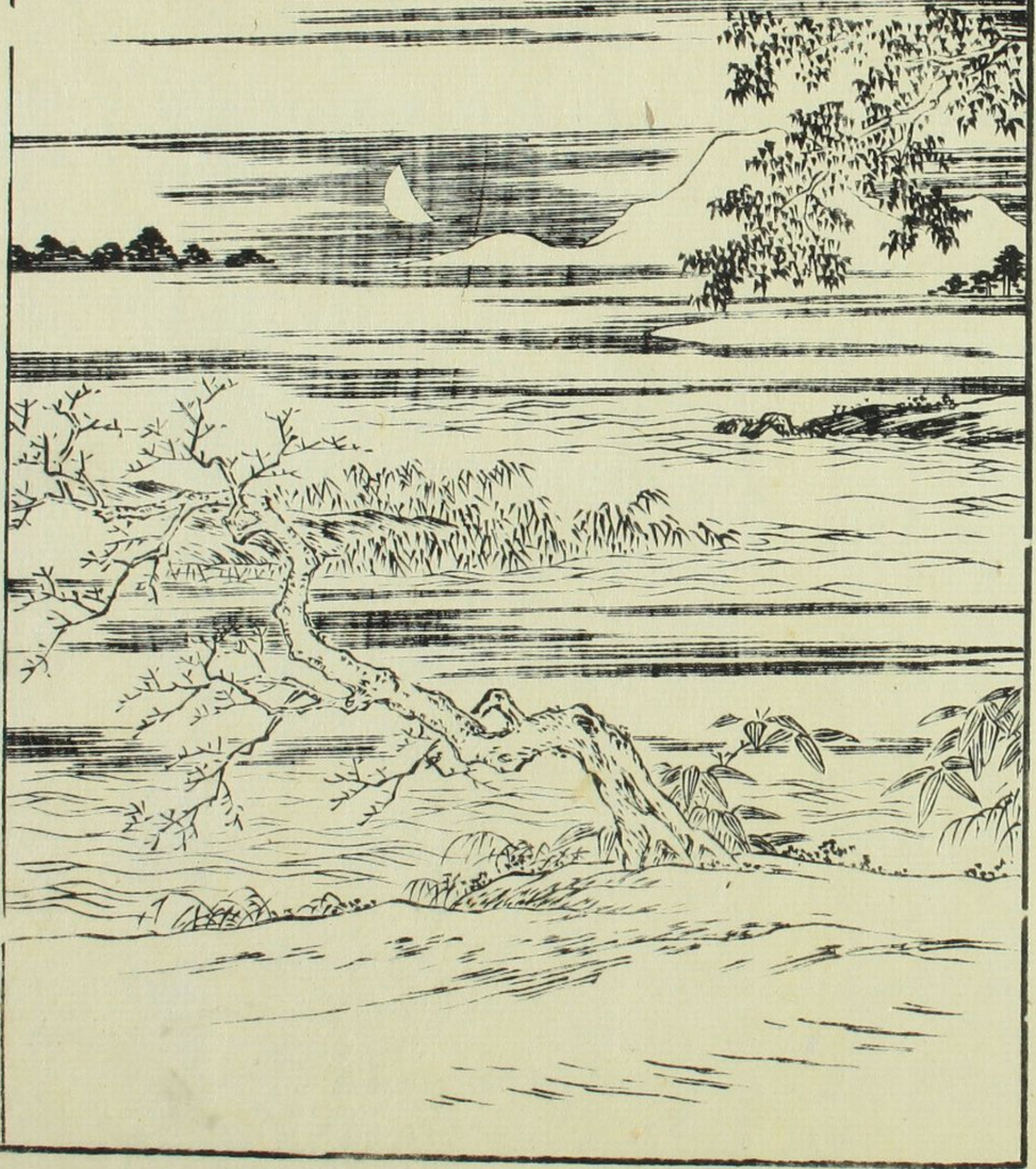
袖

道真准后



梅若丸七郎のう
 比叡の月林寺を
 のんかて花洛北
 白川のあふゆらん
 とくして大津の
 浦よりなるいり
 奥陸の信夫のあま
 ととる人むれひとの
 なちよとくむらむ
 かくていふくこの
 隅田川はあまの
 こころの文よ
 詳あり

因よ云人買採をい
 陸奥南の産
 りりて今もま
 ぬの人其志
 のるのそ忍本
 よ至るこ夫の
 彩田村は日氏の
 人らありて
 活るるの



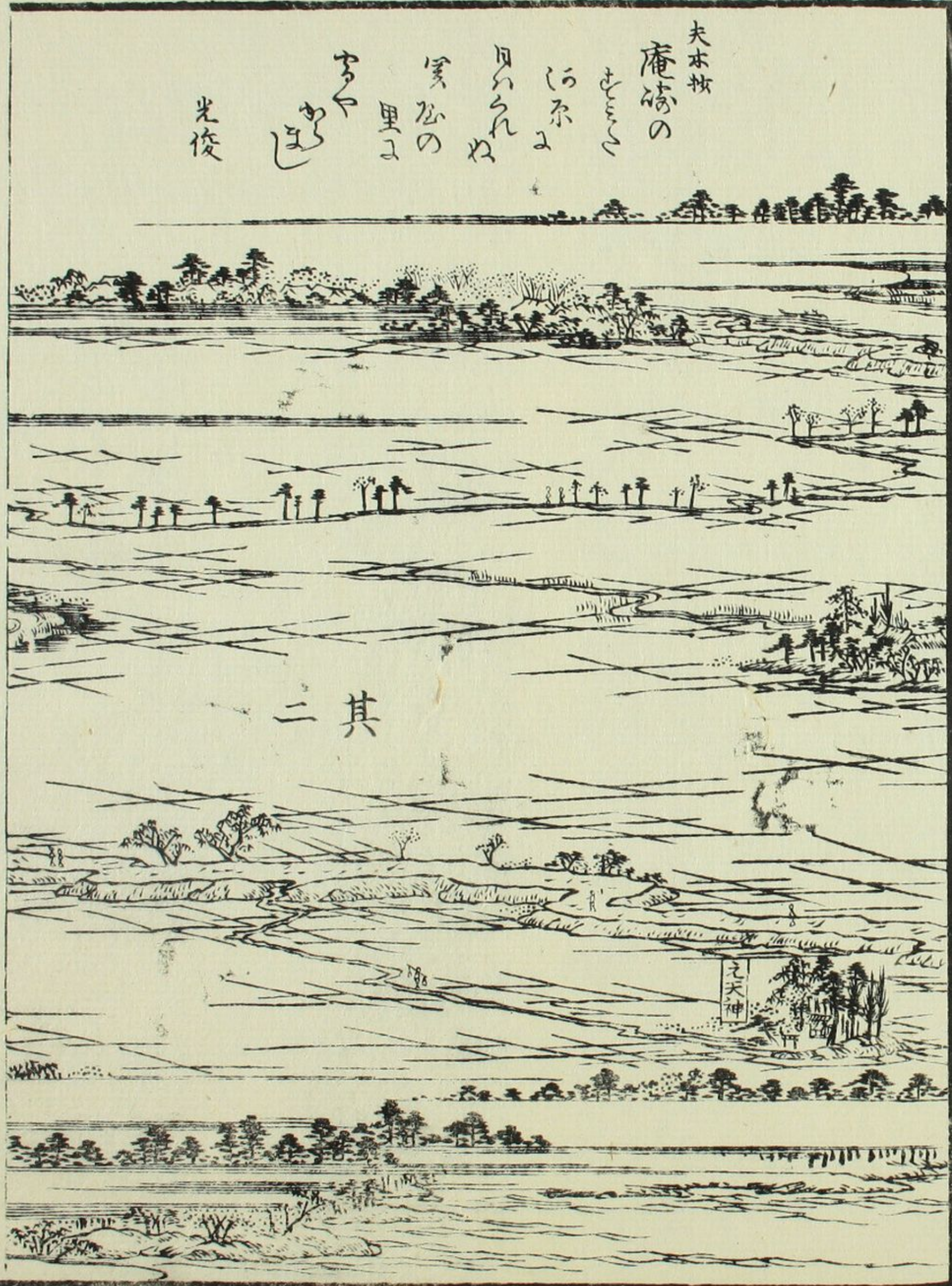
又謡曲横川といふもこれに似たり其畧云々後未蓮院の御宇長曆年中葉紫雲は横川といふ
美少輔のりし人商人は勾引され常陸國磯原の村の社務神官寺にまゐりてありし其母の
うくともあらばひ子のゆきを奪ひてまゐりてありし其母のうくともあらばひ子のゆきを奪ひてまゐりてありし其母の
致り芽花爛漫とて益あつた澤山とて水の中に溺れし其母のうくともあらばひ子のゆきを奪ひてまゐりてありし其母の
しれり里人等其故を問ひ合はれりて彼犯女を神官寺にばい行橋子とて遊ばせりし其母の
ふれりこのあまう物うひひかたしとて久しき母子の対面とて涙もぢれりて位傍りて
より慈悲深かりり直に横川とて眼をこらしめ母子ともよばせりし其母のうくともあらばひ子のゆきを奪ひてまゐりてありし其母の
梅 花 無 盡 藏 詩 註 曰
隅田 在 武 藏 下 總 西 國 間 路 傍 小 塚 有 柳
又 同 書 曰
河 遣 有 柳 樹 盖 吉 田 之 子 梅 若 丸 墓 所 也 其 母 北 白
河 人 云 云

内川 本母寺の後の方の小川をいふ或人の説は往古荒川後瀬川を投よ
流しつ時の言はるりといふり
御前裁畑 同所内川を隔る北の方の山測をとりて作松の本立のまをり
頗美景るり

丹頂池 同所堤の隅あり池の中は小島を築く往古
台命にふりて

此池の中嶋に丹頂の鶴と放ち飼ひありしとあり故小若とせりといそ
庵崎 本母寺の北の方とも又い請地村秋葉権現の辺ありともいそ
澄月お枕は武藏國に加へま本抄藤原草等と下總國に入たり同
名駿河ともあり紫の一本といふ冊子に小梅村の出流を彦崎と云人のり
是もはららとて又同書は昔本所北入海ありて例崎殊小駱一く
あり一故は五百崎と作りしといふ然れとも未考
新後拾遺
彦崎のすまゝ河をに日くまゝに彦崎の隅田河系に布やあらま
今昔まゝ誰看やらんい思はれたのすまゝ河系の秋の月叙 順徳院
建保名所百首 尚長

園屋里 牛田の辺をいふ澄月お枕は武藏國に入たり
彦崎のすまゝ河をに日くまゝに彦崎の隅田河系に布やあらま
今昔まゝ誰看やらんい思はれたのすまゝ河系の秋の月叙 順徳院
建保名所百首 尚長
あつるこの道は彦崎の里もわれを隅田河系のあるありめよ 道見親王



光俊

中

里

の

ね

は

よ

庵

の

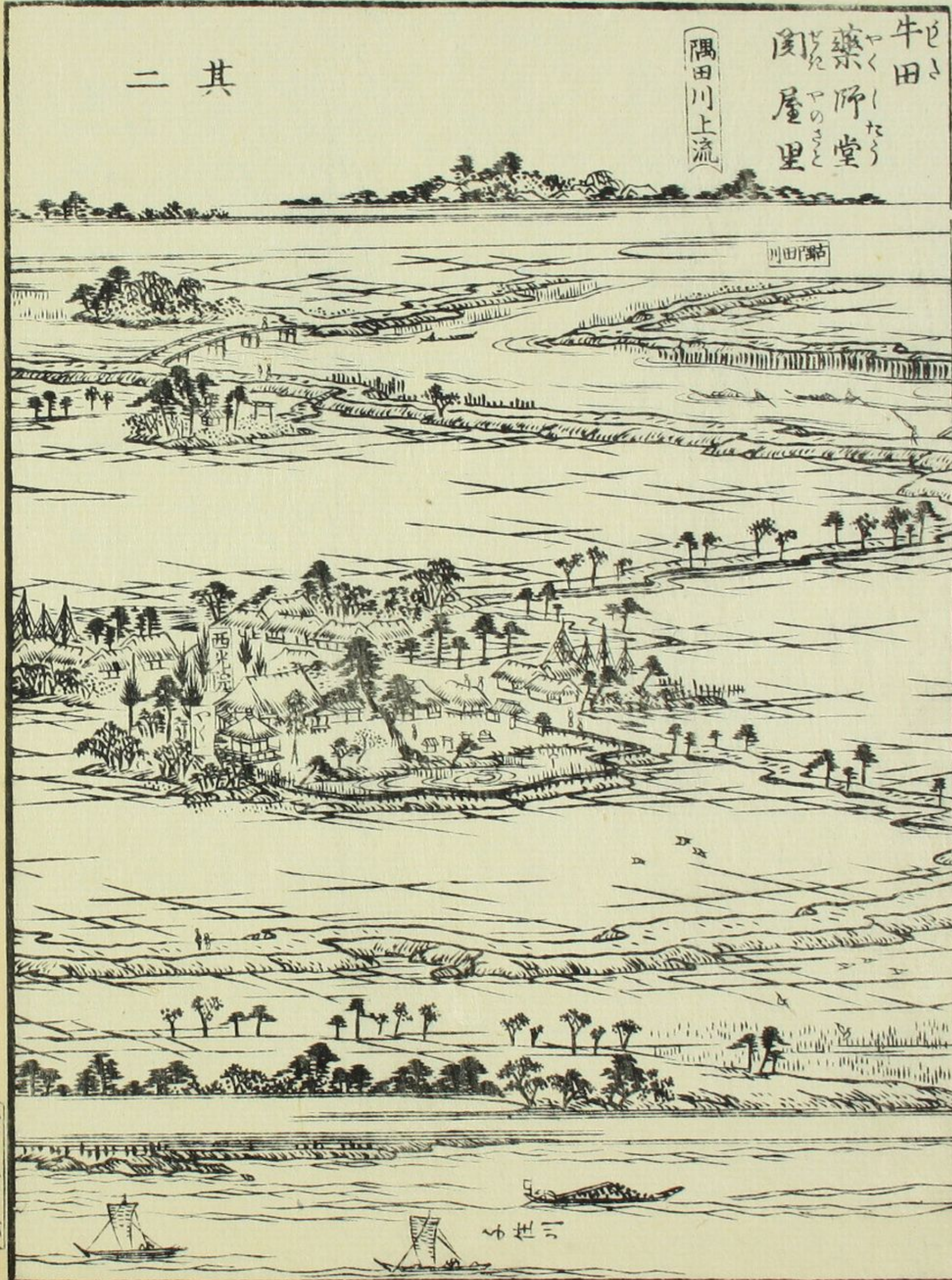
夫

本

枝

二其

大神



二其

隅田川上流

薬師堂

屋

里

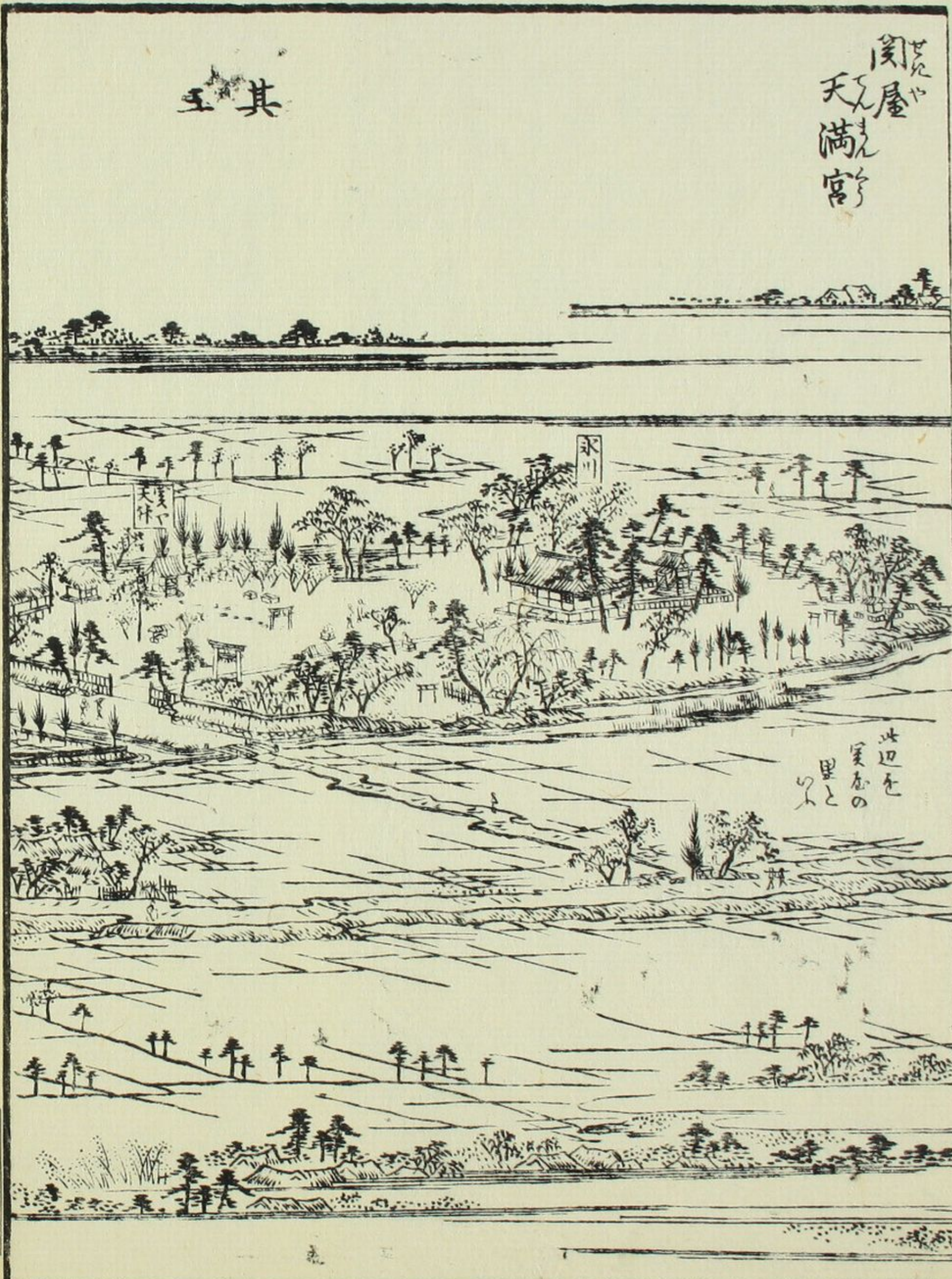
牛田

川田

西光院

舟

関屋
天満宮



其

鐘

り潭

同所隅田河荒川後瀬川の之侯の石をさうして名はく牛田系北条家の不領後

沈没せりとも又橋場長昌寺の鐘ありともいひ今兩寺に存する石の

新鑄の鐘の銘も此のを載たし何れ是あらん

昔は持て居りしと名る此河川と岩瀬の五徳巖といふ所なりしを往昔普門院隅田河

三勝の御中ありしと云ふ二年後拍栗真徳をとりし寺を今の龜戸村に遷せり

其頃専らまじりし鯨を中より投せし土俗傳へく橋場法源寺の鐘とするゆゑの誤り

牛田薬師堂

本母寺より二四丁北の方牛田村の石を真言宗よりて小葉

山西光院と号く徳治二年丁未當國の領主小葉氏の草創用山を

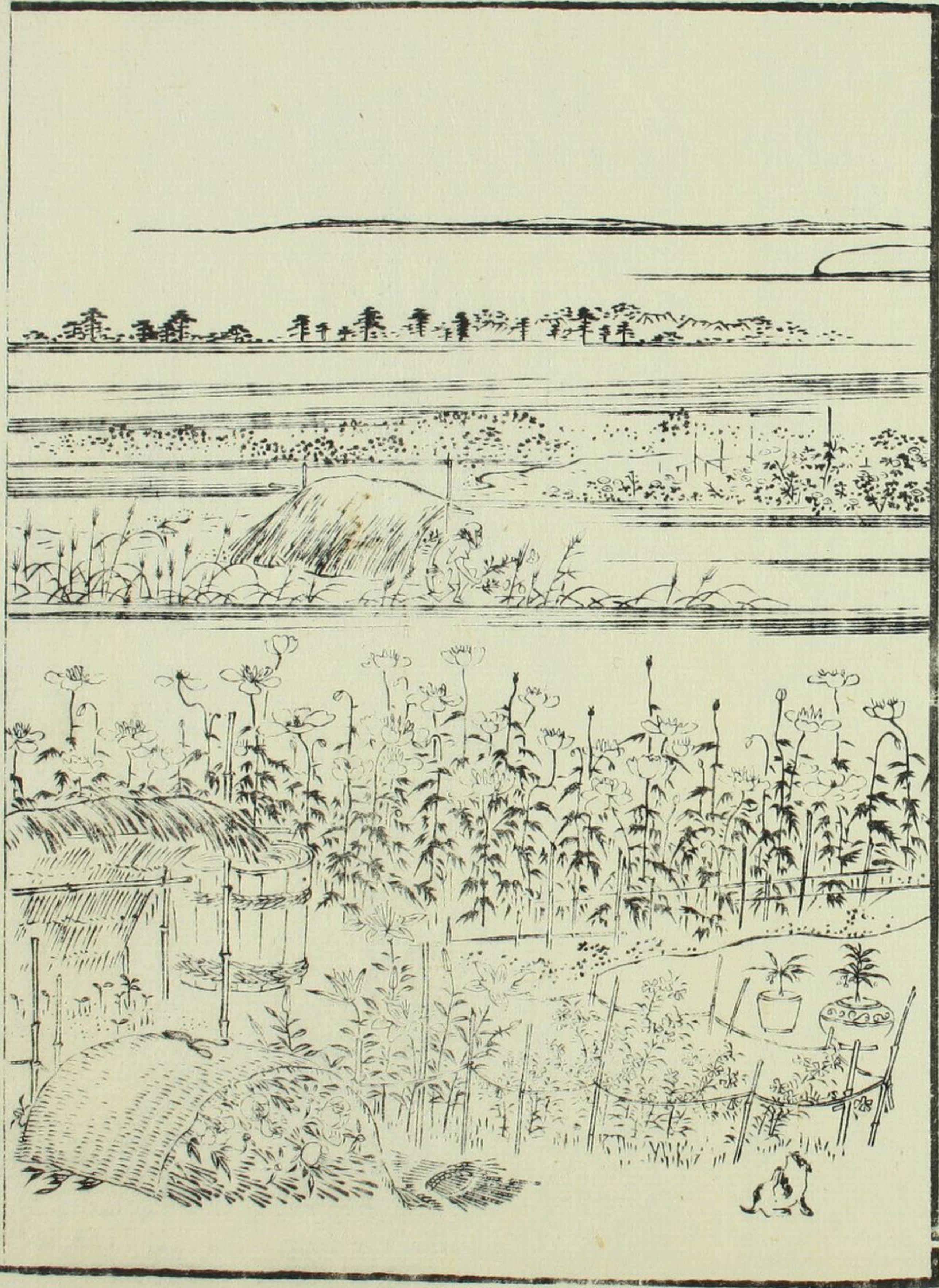
覺音法印といふ本尊溜瀉光如來の弘法大師の作りし小葉常

胤崇尊の靈像ありと云傳へて靈驗著し不孝吉深を其子常英を其子

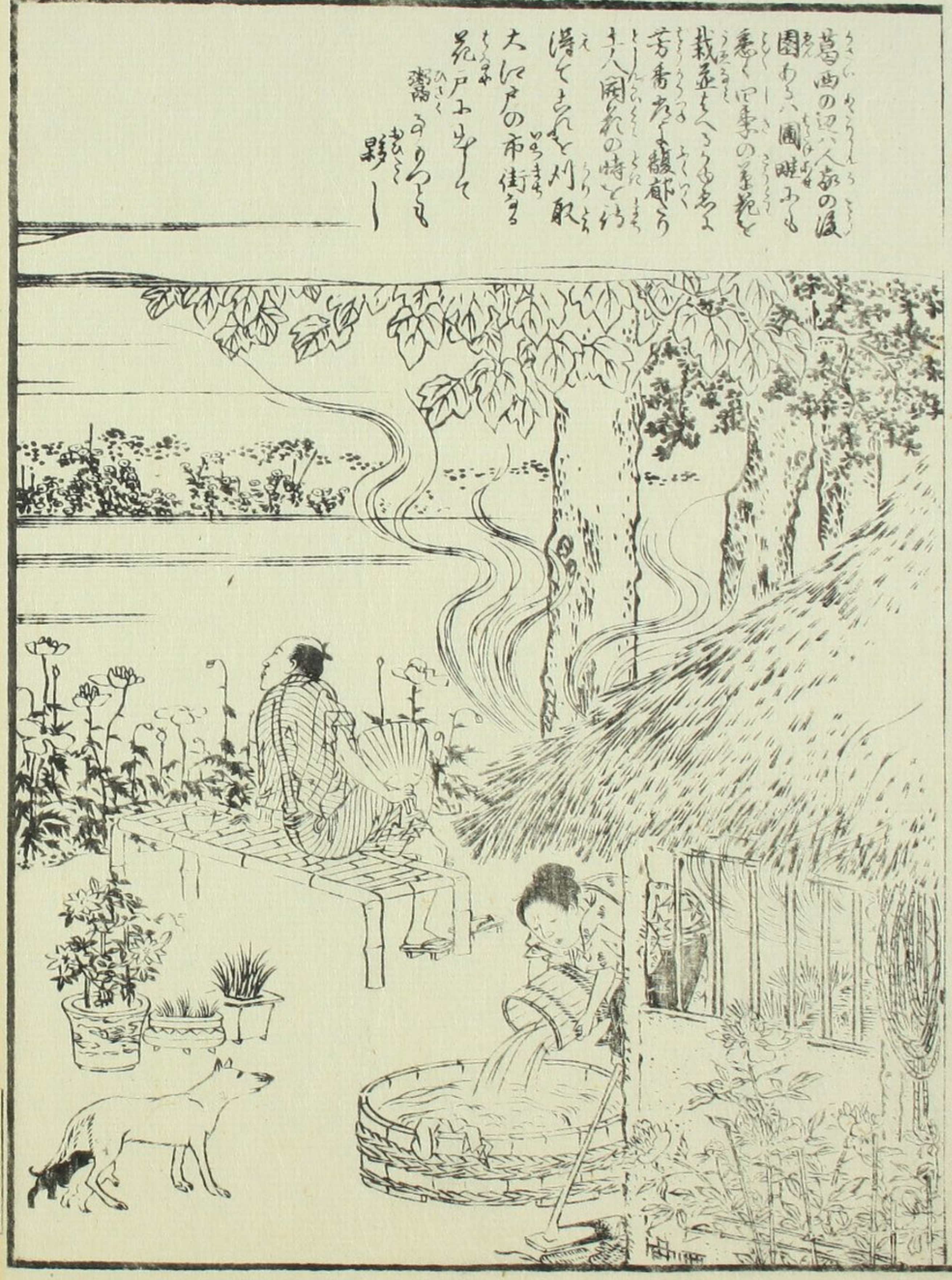
相傳ふ小葉常胤のを裔も同五郎胤朝といふ者あり下徳國香取

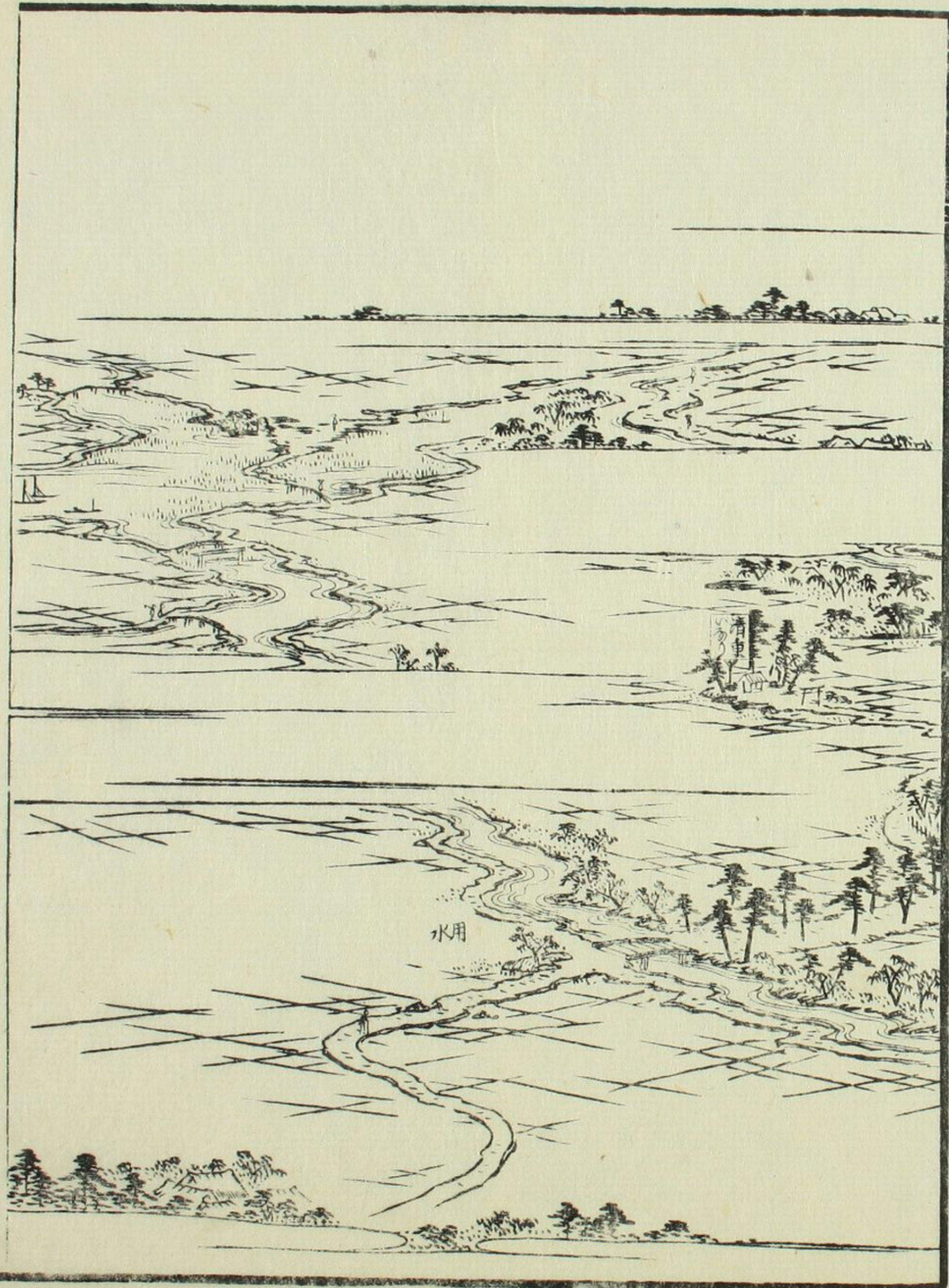
郡石出といふ地は居住し石出日向守と唱ふ此牛田村の胤朝小葉の地なり永和

其末流冷雪入道吉深に至りて此牛田村に遷れ住竟在園の地を

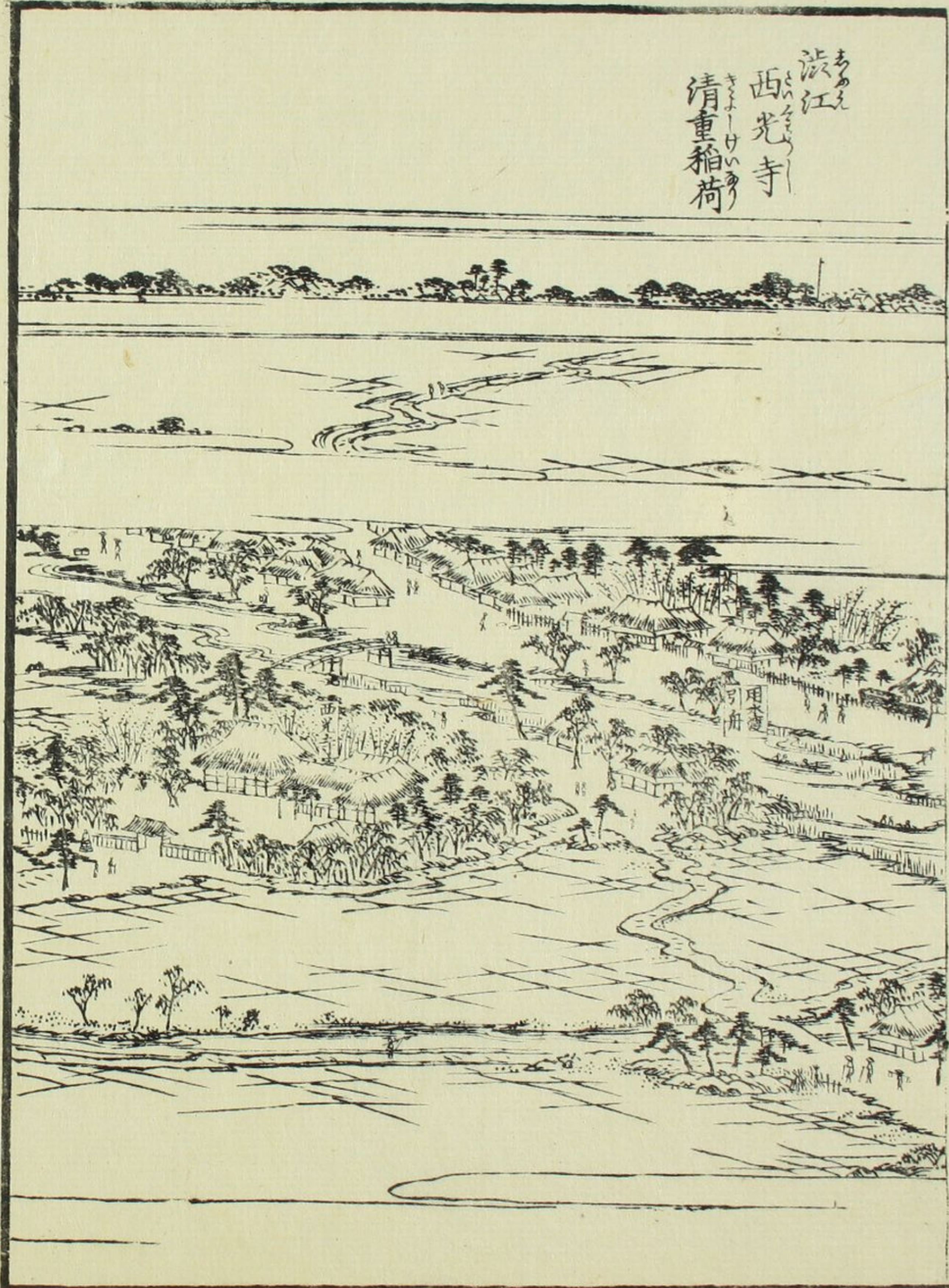


葛西の辺に人の家あり
 園あり八園時ふも
 悉く四季の花を
 栽せしむるもあは
 芳香たふと麗なり
 十八園の時とて
 得てまを竹取
 大に戸の市街を
 花戸ふゆ々
 齋ふりのりも
 影





去る江
西光寺
清重稻荷



一、う、今天、宗、改、む、本、を、八、親、鸞、上、人、親、筆、此、阿、弥、陀、如、來、
の、画、像、と、安、を、當、寺、の、開、基、清、重、ハ、鎌、倉、代、勤、仕、の、士、少、
文、治、五、年、奥、州、泰、衡、平、治、の、後、同、年、九、月、彼、地、の、寺、に、藏、小、
任、せ、し、を、實、朝、卿、鶴、岡、八、幡、宮、拜、賀、の、頃、も、隨、兵、小、加、く、ぬ、
代、々、此、地、に、住、を、親、鸞、上、人、東、國、遊、化、の、時、此、地、に、至、り、清、重、
の、宅、に、投、宿、あり、時、上、人、の、弘、法、に、歸、依、し、弟、子、乃、禮、と、
儲、け、名、と、西、光、坊、と、号、を、又、居、宅、の、地、と、轉、し、寺、院、と、營、建、
し、直、に、西、光、院、と、号、く、本、寺、の、胎、壇、小、清、重、彫、造、も、る、不、乃、
聖、德、太、子、の、木、像、と、安、置、せ、り、

按、東、鑑、小、治、義、四、年、庚、子、十、月、十、日、戊、午、常、陸、國、佐、竹、太、郎、義、政、同、冠、者、
兼、義、と、心、成、り、て、凱、陣、し、兼、倉、小、歸、り、の、條、下、武、藏、國、九、子、莊、に、以、て、
萬、西、三、郎、清、重、小、湯、ふ、今、夜、彼、宅、に、止、宿、あり、清、重、妻、女、と、し、清、重、と、
言、上、り、む、但、一、言、と、申、さ、し、を、清、給、構、の、為、他、所、より、青、女、と、招、く、の、由、
言、上、り、む、但、一、言、と、申、さ、し、を、清、給、構、の、為、他、所、より、青、女、と、招、く、の、由、
言、上、り、む、但、一、言、と、申、さ、し、を、清、給、構、の、為、他、所、より、青、女、と、招、く、の、由、

清重稻荷祠 西光寺の西の畑の中あり 松杉生るるり

古叢 此所ハ葛西三郎清重の墳墓の地と云、今稻荷子

勸清 一、年、の、共、お、こ、此、塚、廟、と、て、土、中、より、石、櫃、あり、れ、出、た、れ、土、人、蓋、と、
し、り、時、櫃、の、中、より、丈、三、尺、五、寸、あり、り、の、弥、陀、の、木、像、あり、り、胸、中、に、佛、あり、
丈、一、寸、八、分、あり、り、の、座、像、あり、今、西、光、寺、に、収、む、除、武、具、の、た、く、も、出、り、り、
青、抵、左、衛、門、尉、藤、綱、第、宅、舊、跡、 青、戸、村、少、あり、 土、人、云、昔、ハ、青、抵、子、傳、り、
永、祿、二、年、小、田、原、北、條、家、の、所、領、役、帳、小、遠、山、丹、波、守、所、領、の、内、ハ、 土、人、城、址、又、
葛、西、青、戸、の、号、と、注、せ、り、今、割、と、二、村、と、西、青、戸、表、青、戸、と、唱、ふ、

御殿跡と云、稱を今猶四方五六拾歩の所除地少く老杉矯々
たる中、小祠あり、此村農人の中、小廓の誰陣屋の何某をト
字、小、昌、あり、て、皆、其、時、世、より、呼、來、ま、る、と、い、り、

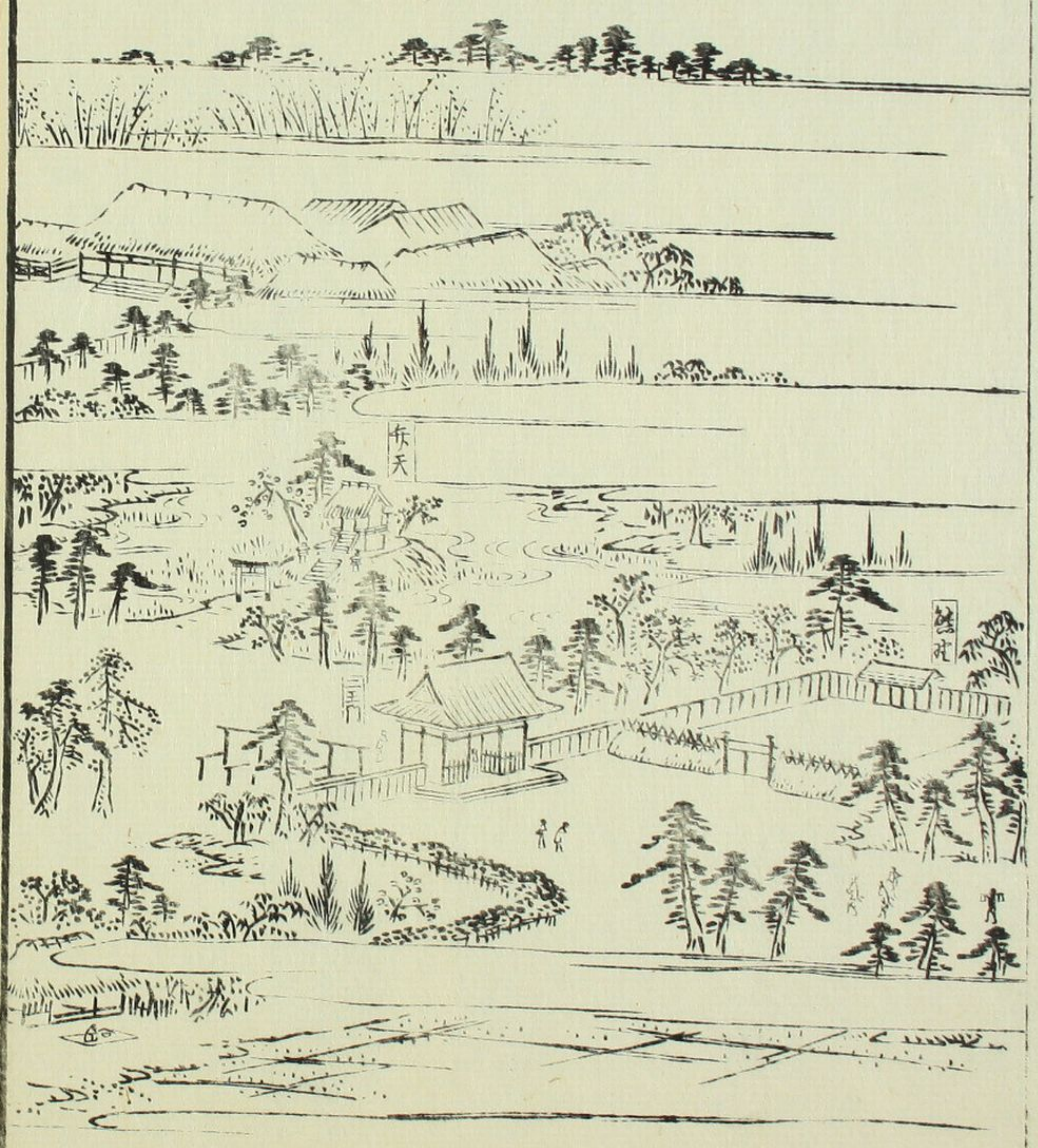
按、北、條、九、代、記、お、こ、太平、記、等、の、書、小、青、抵、左、衛、門、ハ、伊、豆、國、の、住、人、大、場、
十、郎、近、郷、の、後、裔、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、
藤、綱、ハ、藤、滿、の、妻、願、小、生、れ、て、末、子、あり、と、云、こ、ま、る、と、い、ひ、青、抵、左、衛、門、ハ、上、總、國、か、
藤、綱、ハ、上、總、國、美、濃、郡、白、井、の、中、村、國、香、と、い、ひ、人、の、あ、り、せ、り、房、總、志、村、と、い、ひ、書、こ、
上、總、國、美、濃、郡、白、井、の、中、村、國、香、と、い、ひ、人、の、あ、り、せ、り、房、總、志、村、と、い、ひ、書、こ、
青、戸、と、唱、へ、來、る、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、
り、と、い、ひ、是、地、ハ、北、條、九、代、記、に、い、ひ、こ、ま、る、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、
此、地、の、農、民、茂、志、と、い、ひ、こ、ま、る、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、
上、古、質、朴、の、風、俗、と、い、ひ、こ、ま、る、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、
想、像、と、い、ひ、こ、ま、る、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、い、ひ、藤、綱、之、の、孫、と、

古製山葵擦

江戸名所記
 八月廿二日
 元三の朝
 うわす本尊
 の清前
 あつてい
 人より
 されし
 絶えぬ
 あつてい



木下吹薬師堂



所期未得久停明日當去他日再來耳又告弟
顯密之教三其志積年觀直視忽然明淨或遠
至貞觀一如其人志積年觀直視忽然明淨或遠
造營成其志積年觀直視忽然明淨或遠
視道俗有五日有光佛出見或一見多像或綠
色奔起堂見五色不禱見者問其佛未煉指血
重罪至善友教使徹到懺悔或燒頭煉指血
地聞其瑞應賜田數百畝永充供焉後二源僧
都自刻是也光表十神願置佛前之徒合善十
二十名曰淨光寺變懼其實是本鎮國實以告
叙院遷世變懼其實是本鎮國實以告
嘉曆二年夏六月十五日住持沙門義純謹書

本尊緣起曰延曆年間傳教大師東國化益の爲叡山小於
藥師佛と彫刻を漸半の頃一夜此像大師の爰小告て曰く
汝り念ふ所の如く我東國の衆生と利益せんを以明旦便あり
我西より下と大師警き爰覺ぬ然も明旦下野國大慈寺の廣智

其頃叡山小ありし此日歸らん先大師別と告んや來

了謁をある於て大師佛意と悟り靈夢の瑞と語り竟其

像腰と彫刻せしめて錦綉とめて是と纏ひ廣智小附屬を

佛神僅小半より廣智諾して佛像と眷屬より東小還り武剛

到る今の本下川の時は偶然とて一の老翁小逢へ

明神翁欣然とて云く我靈像の到るを待り久しやと我茶庵

小安まへると云智喜んで彼像と翁小附り又此地小伽藍と建

と告翁云時縁の熟せし汝且還り去き依て廣智を此と

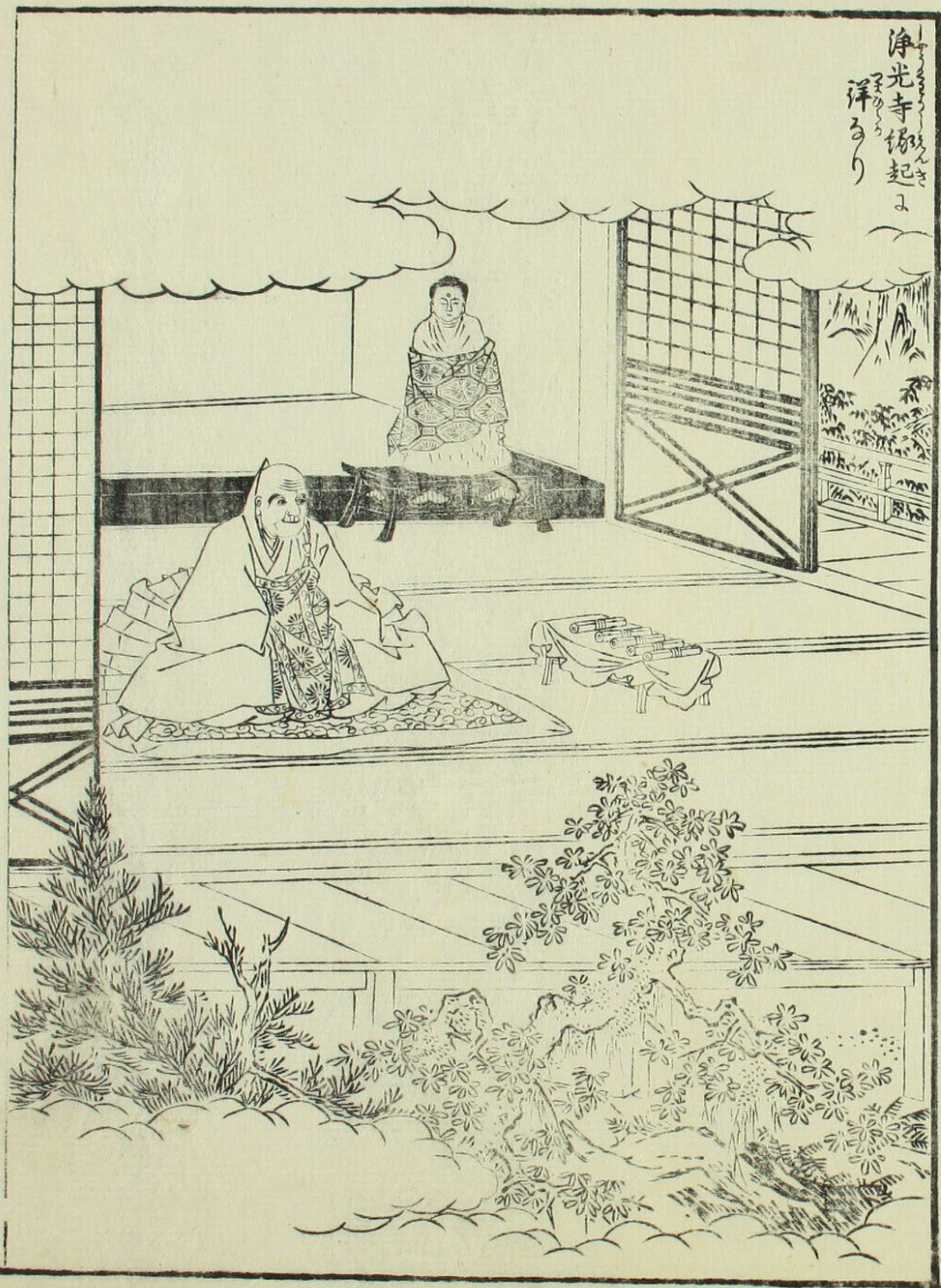
思ひ止り郷里小歸る爾後翁村民小語て云く後善知識ありて必

あふ小來り練若と嘗ん我今西州小あり若歸り來り遅

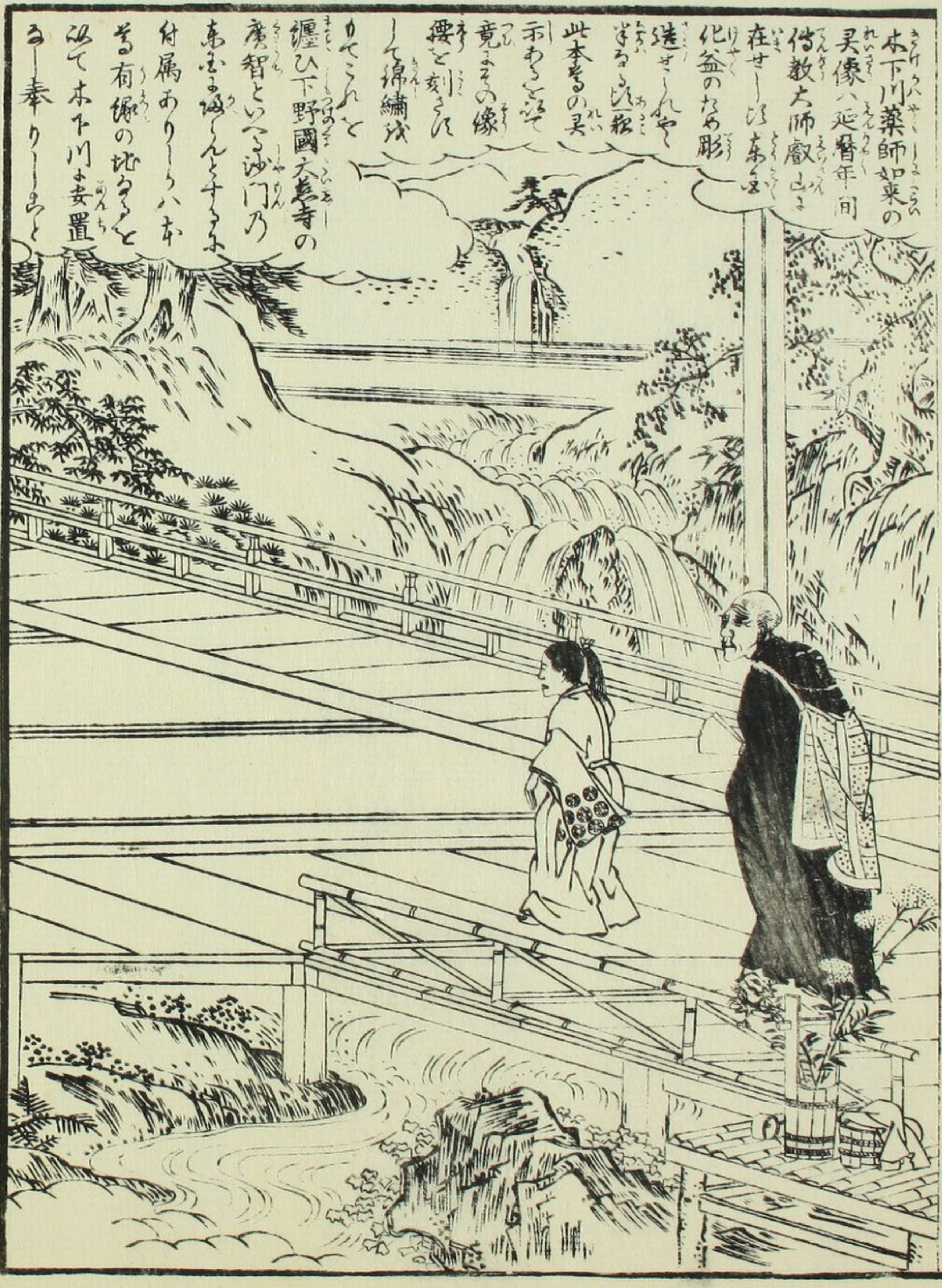
うんみ此語と傳へて云畢り空と凌ぐ西小去まり村里の道俗

天際と見送る共深信誓肩を後慈覺大師東國化導の時

武剛小到り暫淺草寺の觀音堂小留り一日白髮の翁來て



浄光寺場起よ
洋るり

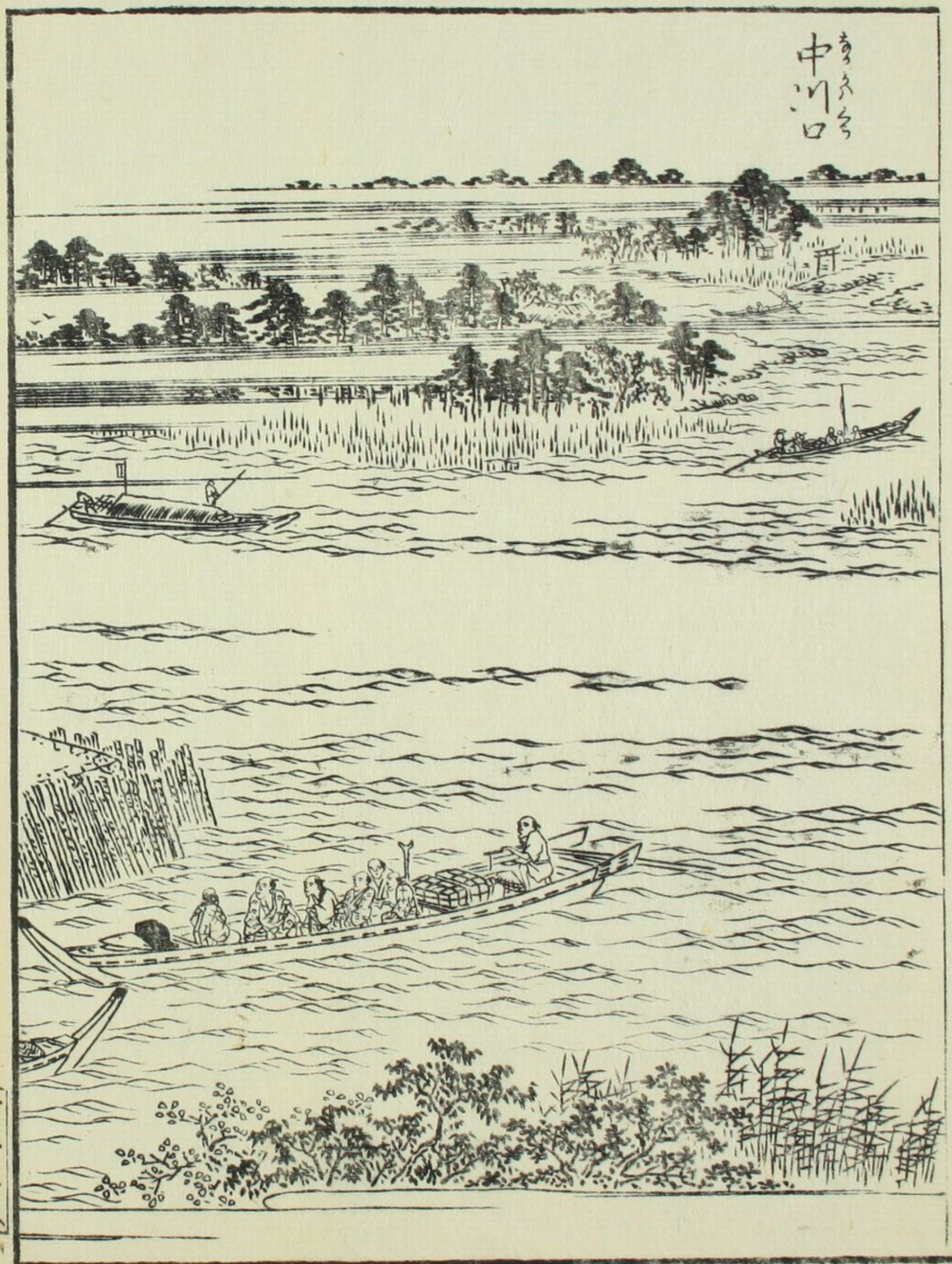
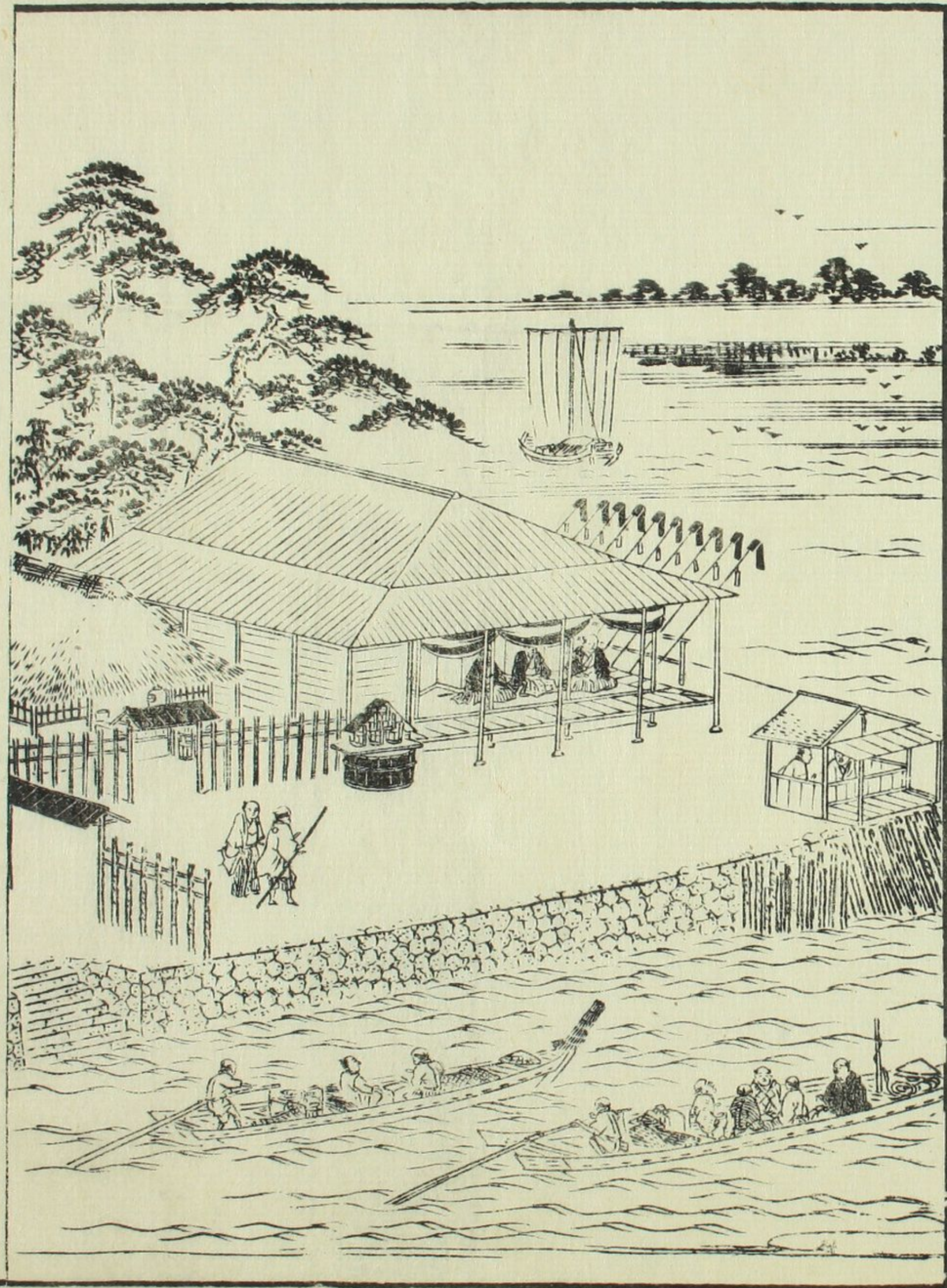


本下川薬師如来の
 具像へ延暦年間
 僧教大師殿より
 在せしは本
 化益のなる形
 造りしや
 此本もの具
 示わると
 竟るその像
 腰に刻され
 して綿繡成
 りてこれと
 纏ひ下野國大寺の
 廣智といふ沙門乃
 東に海にんとすふ
 付属ありしハ本
 寺有像の地を
 以て本下川に安置
 る奉りしと

大師小告て云く此所より東北に靈地あり藥師乃靈像以
安まるといひ畢て後其方と失ふ大師東北と望み忽然として
瑞雲起り中小青龍現を依て奇異の思ひを以て漸く寺と出
て元小むる小果して藥師佛の靈像あり此時村人等集り來り
前の唱翁り言と告大師として其人ありと稱し終小合郡官吏
及び富民等財と傾けく寺院と建せんとす則弟子慶寛よ
此地と附屬ありしを慶寛嘗構の志と勵し貞觀二年の春に
至り諸堂落成を以て於て慈覺大師と開山と稱し性古乃
瑞小周く山と青龍と号す朝廷其瑞應と聞ひ田園百畝
と賜ひ永寺供に充て後惠心僧都二眩士及び十二神將の
像と彫刻ありて佛前小安せし又慶寛十二大願と表し
十二の衆徒と置十二院と合せて淨光寺と号すあり
當寺、草創より已降九百四十有餘年と經る古刹あり

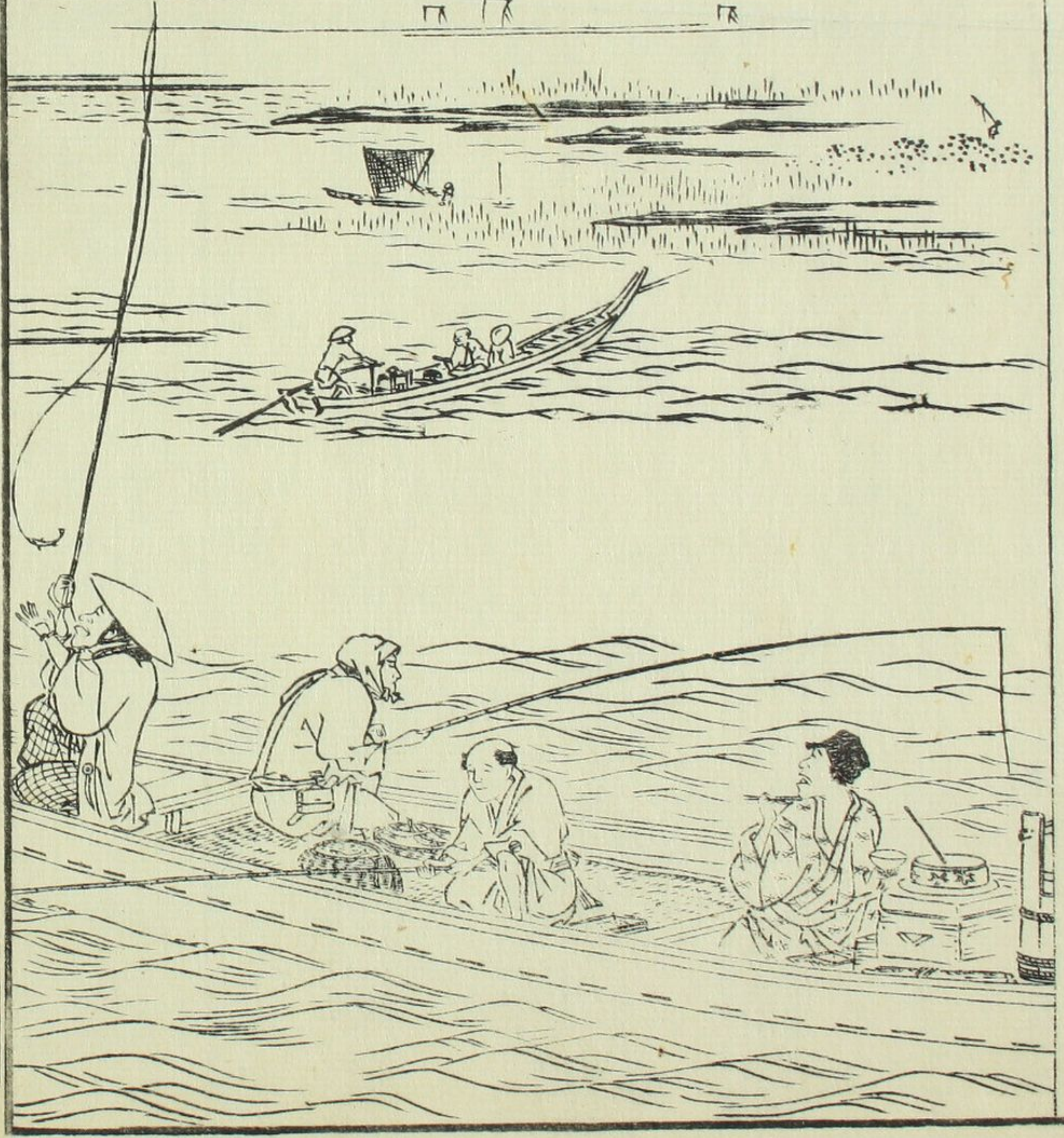
本号、光と一天小耀し十二大願の衆徒ハ薨と山中小並へ
日夜の勤勞怠慢なく法燈月と越く赫々たりしは後
鬪争國々小起り天下大小乱まらる頃堂宇ハ破却し寺願ハ
没收せしまた兵燹小罹りて焦土となり續り止る住僧も
なく唯本号の草堂の中小在せし天正の末四海昌平に
歸り來り後同十九年住僧良完懇訴して竟に某師堂
願の朱章と揚りねあつたりしより已來國家泰平の祈念
念ふよりあく本号の靈驗いよ著しあり

中川 隅田川と利根川の間に夾きて流るる中川の号あり
とて荒川の分流熊谷の辺りより遠く埼玉と足立
と北西郡の合と流を利根川の分流も川俣よりあり
二水猿り俣の辺り合版塚大谷龜有新宿等の地小添へ青
戸奥戸平井本下川及び小村井逆井と經て海小入

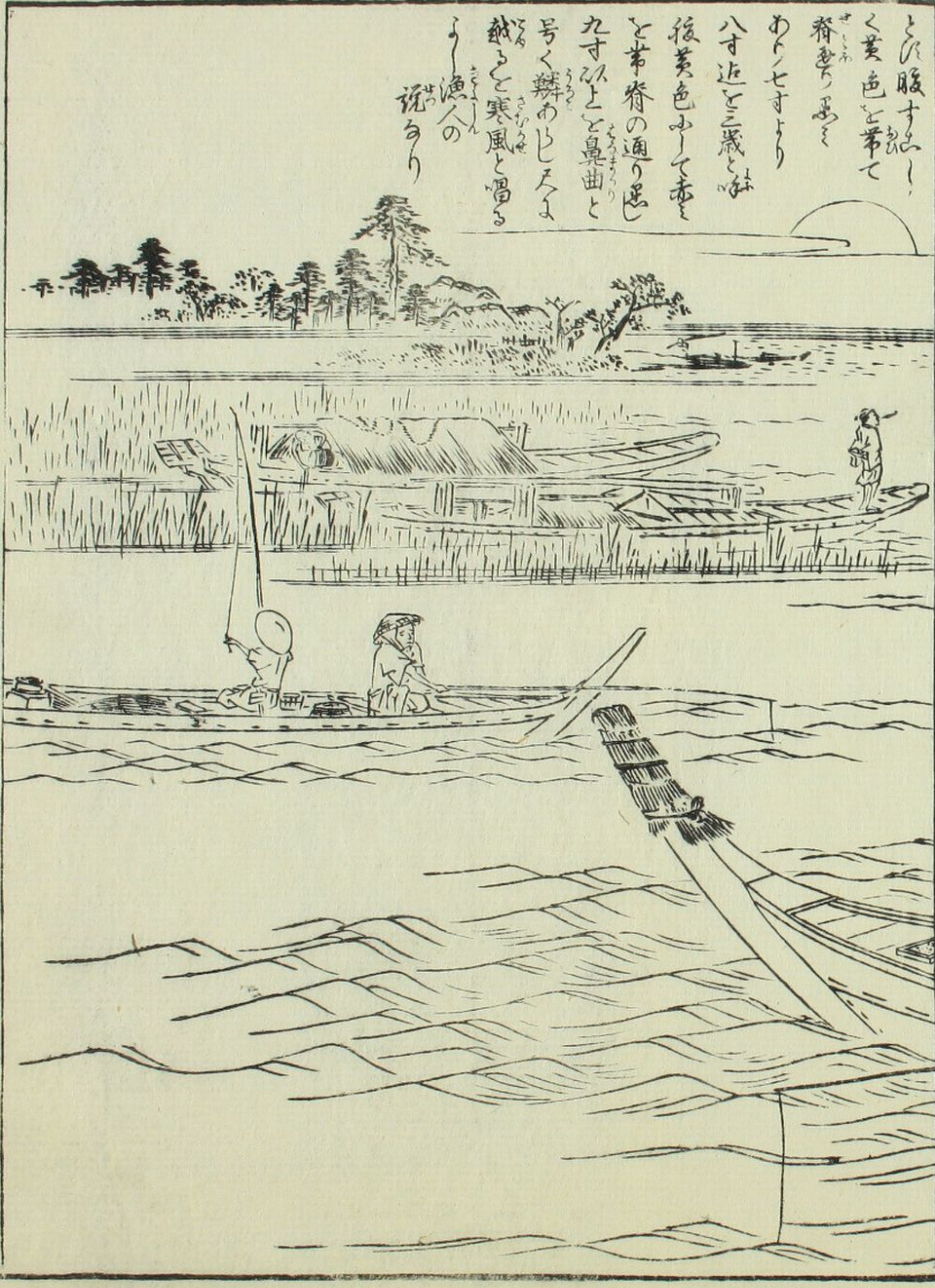


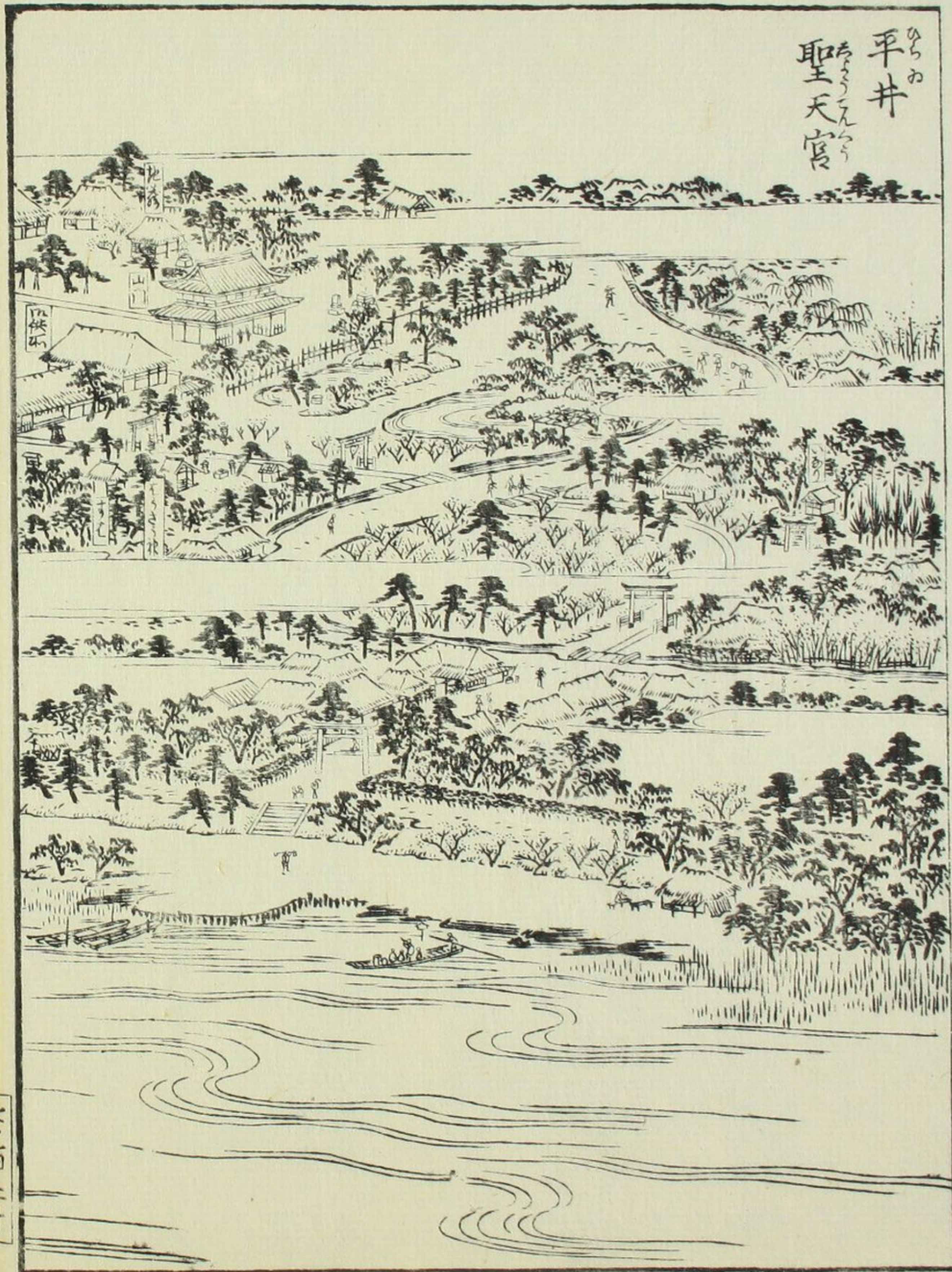
中川釣鱧

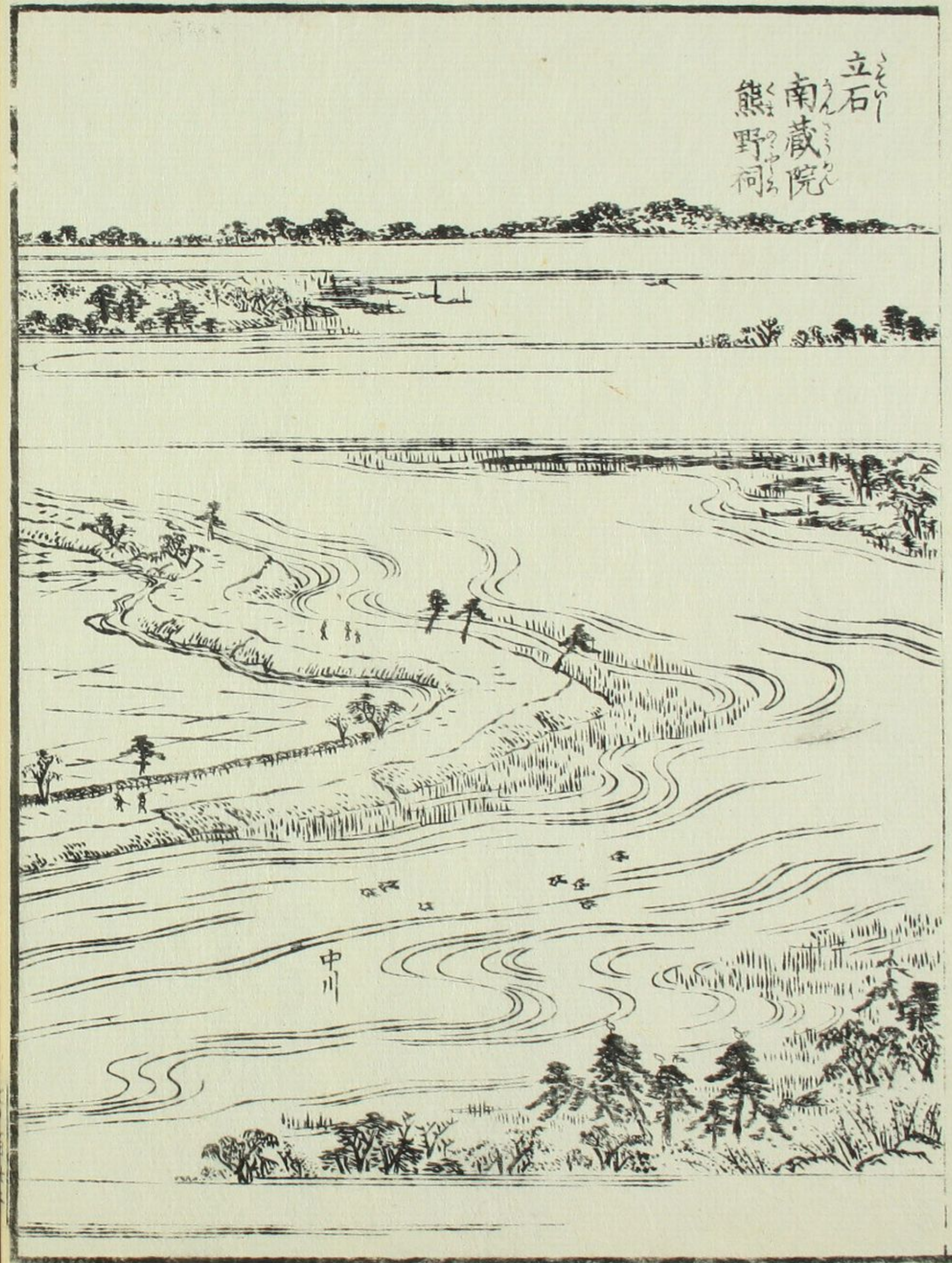
春鱧三月の末より
四月小入と盛るる春
約し云ハ實文の以南総
任より船頭仁喜と
いふは岩崎共をまとい
よ人是不徒今岩崎流
との六則は入より始
りて早より後春鱧
と釣るる世小盛るり
しく云林鱧ハ八月の末
より九月の初と節
と云然れども十月より
寒氣おつれをゆり
あつる流川釣お事い
漁人海より産する以白
鱧と呼川小ありと青
鱧と唱ふ又鱧は大小
の差あり高歳ハ後
白く五寸と二歳



とハ腹すい
く黄色と帯て
脊をうま
わんせすより
八寸迄と三歳と
後黄色やうと帯
と背脊の通り思
九寸以上と鼻曲と
号く鱧あじとよ
秋と寒風と唱
う漁人の
説あり







石村
石



那と歴より後親鸞上人胤次り家小止宿せらまき一頃
 胤次上人の宗化小帰一室と嘗々此本寺と安す然り
 永正年間兵火小罹々々堂宇悉く焦土とありしうと本寺の
 持退て恙ゆ一とあり天下承平の時小なり終又一室と闢る
 善通寺と号くしり
秋元刑部左衛門の孫今も此村の村は四十有
 余軒存しての寺も善通寺の門徒なりと云ふ
 阿弥陀如来画像一幅 中将姫製まらぬとあり惣地六韜の縁ありて御首の
 八日より十日迄此像と掛く諸人よ扱せむ注古
 賦難小逢とくとも威風のありて夫れすあり
 十字名號一幅 此像と對て與へらまき一とあり公も傍て善寺あり
 夜
 醫王山妙音寺 東一江村小り真言宗ありて建久元年秀栄
 上人開創する所の精舎あり阿弥陀如来と本尊と以高寺小安置
 の茶師如来の立像ありて佛工春日の彫造ありと云傳は古敏也
 安房守某あり人の念持佛ありて靈威の尊像ありと云辨哉天
 此宮ハ堂前池の中島ありて寺記小寶治元年丁未勅清と云

實頭盧尊者像

堂中小安置を寺僧侍へて
佛工春日の作りよりあり
高さ一尺ありあり荒木造り
て容貌甚異相あり



八覺山妙勝寺 西二の江村古川の通りあり日蓮宗にして中山

の一鴈寺葛西の觸頭あり弘安年間 或ハ徳治二年 日尚上人乃

草創ありて宗祖大士の像ハ日祐上人の作り 日祐上人ハ中山の第

宗法盛なり一徹宗祖上人微妙の音声ありて讀經まじると覺

中感得の影縁と摸造りて用眼供養し日尚上人ハ附屬あり則基坐小

澤し置りて世俗讀經の高祖大士と稱せり夫より後ハ修飾と加ふる毎

々今ハ志ありと中山界世貫主より修らるるの法狀披通あり

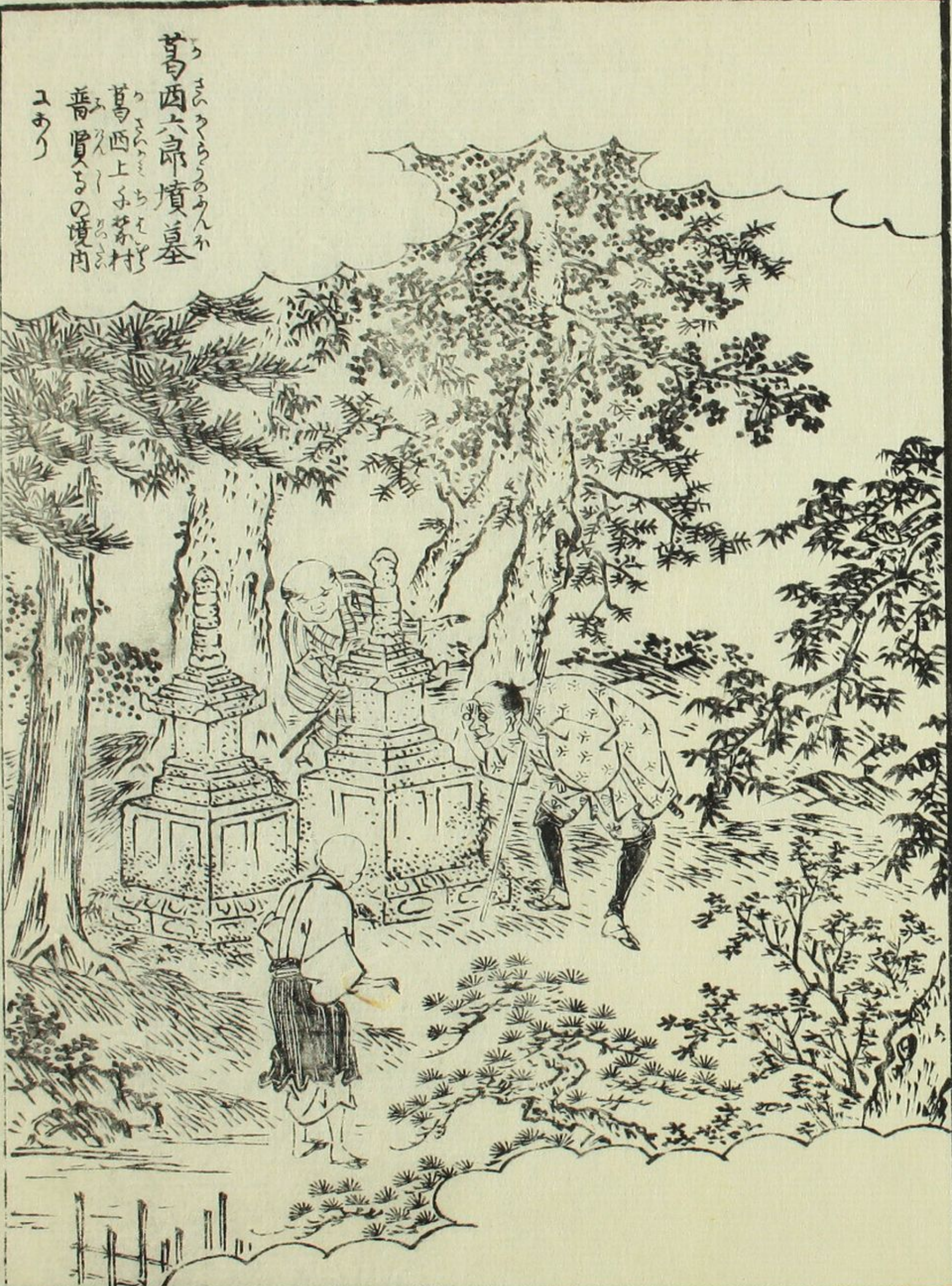
水神宮 日尚上人ハ尚寺開創の主なりて平氏の末裔なりと云ふ

魚人五郎何某多の助けありて其來と用て自通家何某なりと云ふ

傍小草菴といふと廣宣流布の志願なり此水神宮ハ日尚上人初洞舟小

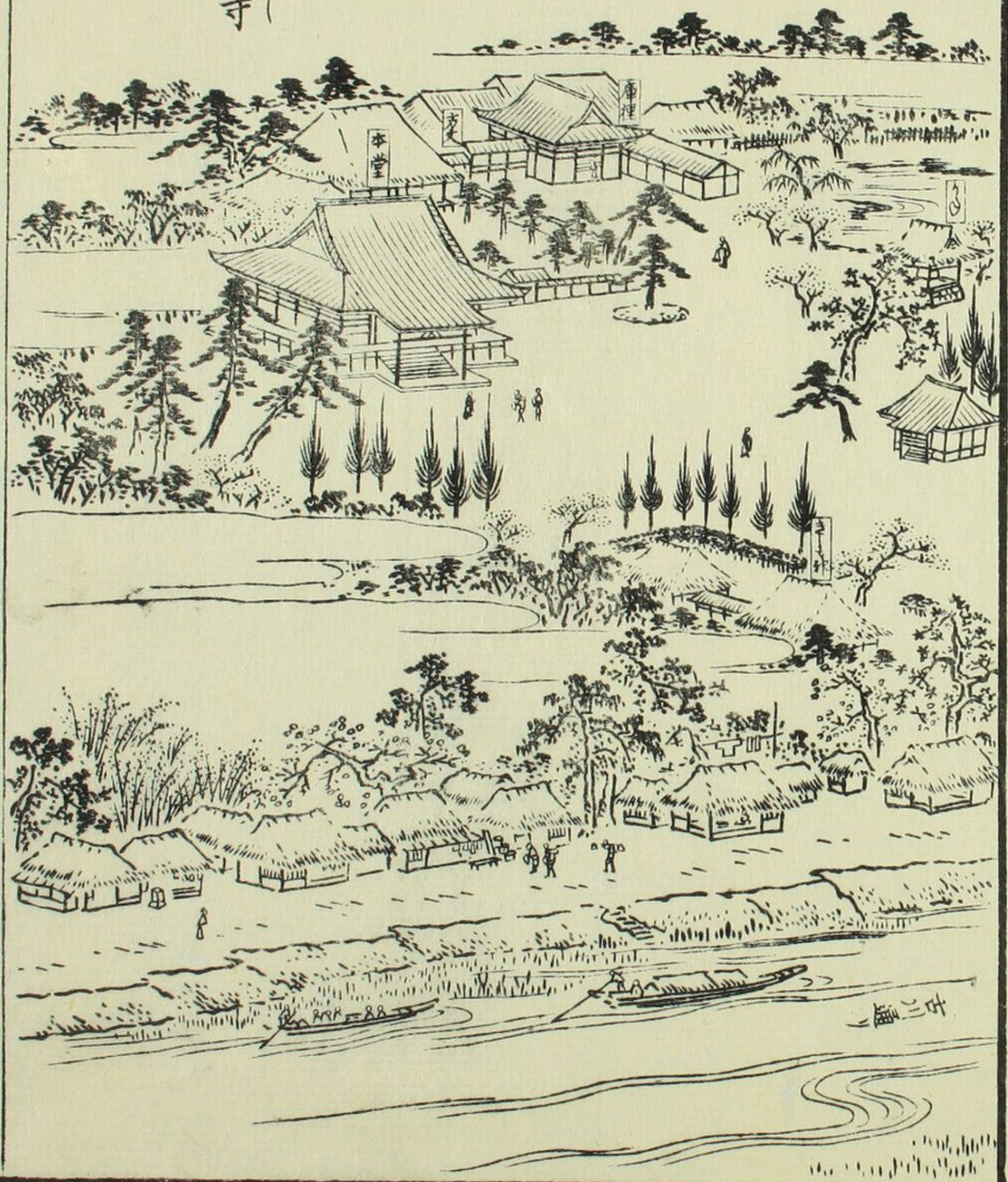
漂蕩ありて項深く水神ハ祈誓して波浪の難と道き一報恩のこも

時上人の慈眼とて後不退ハ一乘の法味とて身つらきとあり



葛西六郎墳墓
葛西上子茶村
普賢堂の境内
ユあり

二之江
妙勝寺

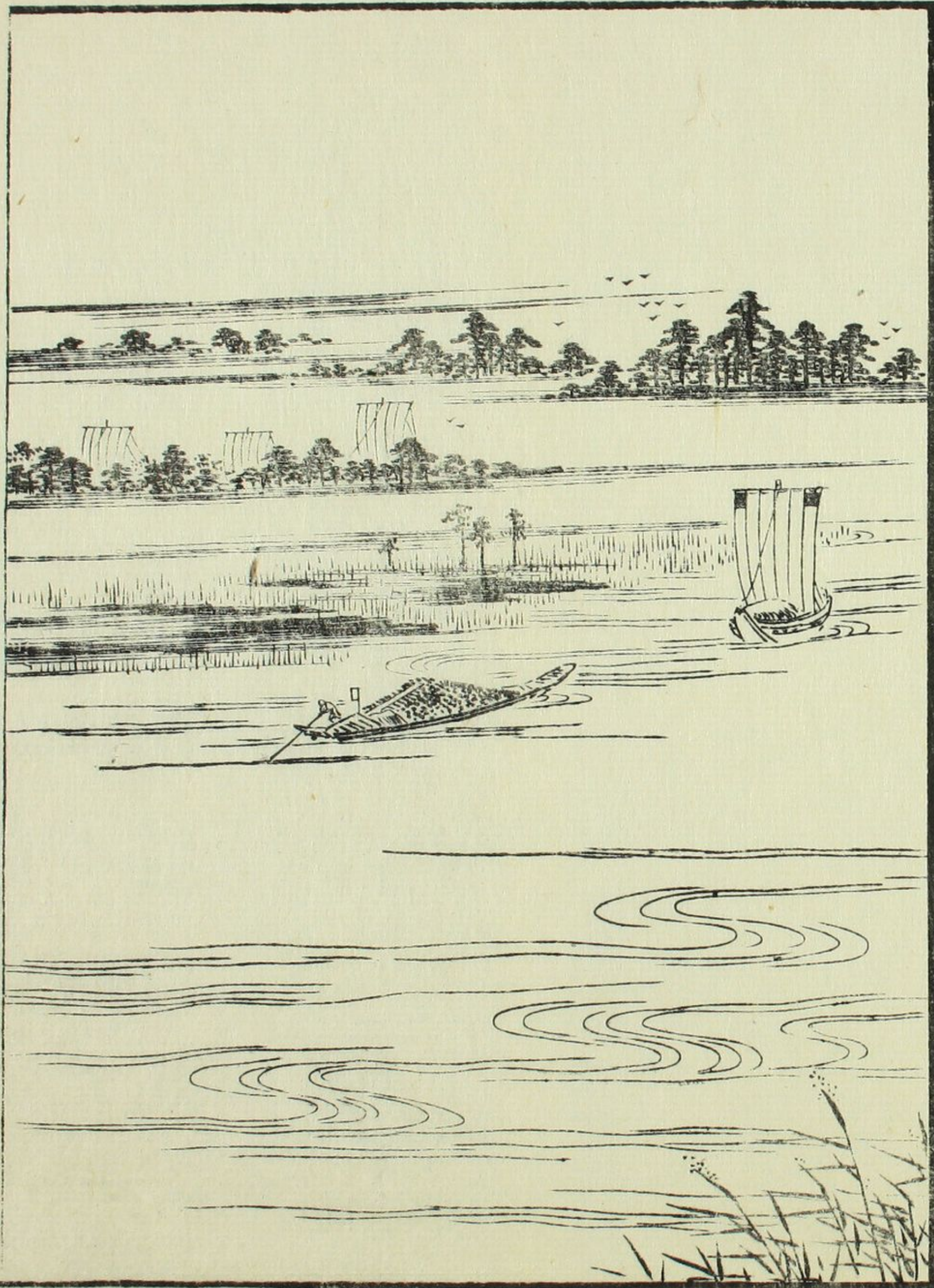


二之江

二の江より今井
舟場桑のわら
小産もる海苔と
世々葛西海苔
と称す本草
所謂紫菜の類
中々海草海苔
又異なり



七百六十六



今井の津頭

柴屋軒宗長永長
年の記行東土産
隅田川の河舟
葛西の府のち
と半日
葭芦をありき今
井と津あり
下で浄土の寺
浄興寺に立ち
とあれは

此津の

あり

あれ
たり



今井
淨興寺
琴彈松

東土産
了居士根

きかぬ
雲の

千里

方丈の西にさし
び雪のりりり
あり云々
宗長



か奇と詠せしは是より後琴ひき松と号まきかへん

武蔵野紀行
此寺内ふあり宿まきかへん
松風入夢といふこと
あり云々

松風の吹まきかへん
北条 氏康

按小氏東紀の記せし淨興寺と世人木下川の浄光寺と思ひあはせられしもの
既ふ久し寺号ハ松風といふ文字與と光との違ひあり氏康おらひ宗長の
共ふやのあり文字淨興お作らまきかへん寺をいふことあり
下川の浄光寺ハ善覺大師開創の精舎なり天台止觀の法燈赫々たり
當寺ハ記主禪師の開基中より四より浄業の仙継り終る庭前琴彈松と稱ま
古株もあり又東土産まきかへん當寺ハ西南の谷遠くひひけり芙蓉の峰と相對
眺望まきかへん宗長まきかへん句意またり云々然る時ハ此まきかへん川の終るを明燈といふ

天川山妙福寺 下鎌田村あり淨興寺の北二町半を隔て浄土
宗中より上今井村金藏寺に属す中興開山ハ德譽叟公和尚と号
本寺ハ阿弥陀如来なり

親鸞上人御影堂
此地をよきりあり時より早魁中里氏の敷むとく
三年焔浴の頃自身の肖像を造りてこま残し置まきかへんあり
毎歲四月八日より



同十日近佛龕を削き観音上人の鏡池本堂の後より止人自ら削りて御影を削き因道俗群集す堂の前の此池は面影と云ふ袈裟懸松同傍にあり日樹太子堂の前の松あり太子堂御影堂は相對せり聖徳太子の靈像を安んず太子自ら削りて云傳二月廿一日帝釋天王柴又村經榮山題經寺安置二月廿一日當寺ハ寛永年間江外の草創なり

縁起云當寺第九世日敬師在任の頃堂宇大ニ破壊を師深く是を歎き普く四方を行乞し再興の志を勵し終に其堂舎を造改んとする時梁上より此板長二尺五寸を得て旧當寺幅一尺高祖大士手刻の祈禱本と稱するものあり由云傳へし其の縁長二尺五寸此時に至りて空くぬをそと則すなはち本もととものへ厚あつ五分あり梨なし板いたなり片面へん八はち中ちゆう央おうは首くび題だいあり左右みぎは兩りゆう菩ぼ薩ざつ又また病びやう師し消しょう滅めつのの數すう字じをを刻きし其下したは五ご月げつ日にちとあり大だい士しのの号ごうは花はな押おしと印せり又また片ぺん面めん帝てい釈しゃく天てん王わうのの影えい像ざうあり右みぎのの沖おきは不ふ鋸こと持し左ひだりのの持もちは閑かんきと忿怒ごのの相さうと稱す是こゝ除じゆ病びやう延えん壽じゆうのの本ほんも惡あく魔ま降かう代だいのの容よう方かたり信しん純じゆんのの草くさは八はち是こゝと印し帝釋しゃく天てん降かう臨りんあり

